

第38回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表要旨



2014年10月26日（日）

於：横浜市歴史博物館

主催 神奈川県考古学会

共催 横浜市歴史博物館

後援 神奈川県教育委員会 横浜市教育委員会

川崎市教育委員会 相模原市教育委員会

公益財団法人かながわ考古学財団

表紙：横須賀市 船久保遺跡
裏表紙：相模原市 川尻中村遺跡
顔面把手

開催要項

開催日：2014年10月26日（日）・会場：横浜市歴史博物館 講堂

10:00～10:10 開会挨拶 神奈川県考古学会副会長 中村若枝

調査・研究発表

10:10～10:40 相模原市 川尻中村遺跡 第5地点
大成エンジニアリング 大川康裕・青木雄大氏

10:40～11:10 横須賀市 船久保遺跡
玉川文化財研究所 戸田哲也氏

11:10～11:40 寒川町 宮山中里遺跡
(公財)かながわ考古学財団 井関文明氏

11:40～13:00 昼休み

13:00～13:30 横須賀市 矢ノ津坂遺跡（平成25年度調査）
吾妻考古学研究所 田村良照氏

13:30～14:20 三浦市 雨崎洞穴・勝谷遺跡
赤坂遺跡調査団 中村 勉氏

14:20～14:50 伊勢原市 伊勢原市No.163遺跡
(公財)かながわ考古学財団 井辺一徳氏

14:50～15:00 休憩

15:00～15:30 鎌倉市 若宮大路周辺遺跡群
三ツ橋正夫・斎木秀雄氏

15:30～16:00 伊勢原市 伊勢原市No.71遺跡
(公財)かながわ考古学財団 木村吉行氏

16:00～16:30 小田原市 小田原城三の丸元城跡 第II地点（第3次）
・元城塙 第II地点（第2次）
玉川文化財研究所 太田雅見氏

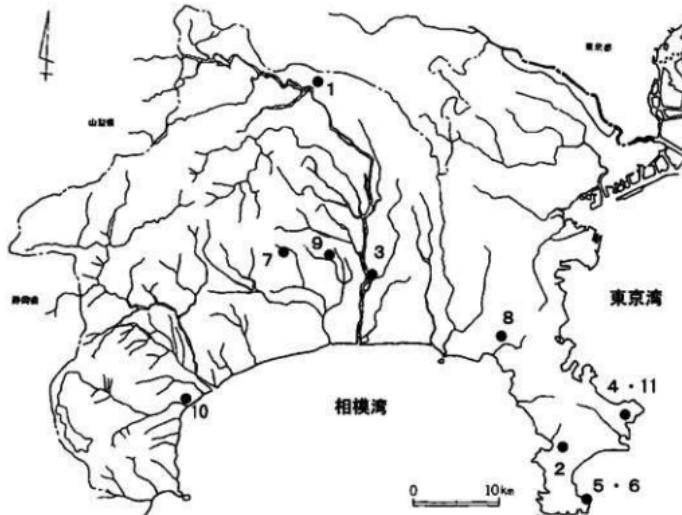
16:30～16:40 閉会挨拶 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之

<図書交換会> 時間：10:15～15:15 会場：横浜市歴史博物館 研修室

目 次

<調査・研究発表>

1. 相模原市 川尻中村遺跡 第5地点 一縄文時代中期環状集落址居住域の調査— 3
 2. 横須賀市 船久保遺跡
—縄文時代早期前葉の陥し穴群と弥生時代住居跡の調査— 9
 3. 寒川町 宮山中里遺跡 一相模川東岸下流域に展開する弥生時代の環濠集落— 13
 4. 横須賀市 矢ノ津坂遺跡 平成25年度調査 一戦略的要所に位置する集落跡— 19
 5. 三浦市 雨崎洞穴 一三浦半島の弥生黎明期を告げる洞穴遺跡の調査— 25
 6. 三浦市 勝谷遺跡 一砂丘につくられた墳丘を持たない墳墓群— 29
 7. 伊勢原市 伊勢原市No.163遺跡 一大山山麓で発見された石敷道路状遺構の調査— 33
 8. 鎌倉市 若宮大路周辺遺跡群 一検出された道路を中心にして— 39
 9. 伊勢原市 伊勢原市No.71遺跡
—栗磧地区の調査で発見された旧石器時代、古墳時代～中世の遺構— 45
 10. 小田原市 小田原城三の丸 元藏跡第II地点(第3次)・元藏堀第II地点(第2次)
—中世戦国期の陣子堀を改修した玉石積石垣を伴う堀— 51
-
- <紙上発表>
11. 横須賀市 矢ノ津坂遺跡(平成16・17年度調査)
—東京内湾を望む弥生～古墳時代の高台集落— 57



図中番号は上記 調査・研究発表 の目次頭の番号と一致

相模原市 川尻中村遺跡第5地点
— 縄文時代中期環状集落址居住域の調査 —

大川 康裕・青木 雄大

所在地 相模原市緑区向原二丁目 1150番2
調査機関 大成エンジニアリング株式会社
調査担当 堀尾孝志・大川康裕
調査原因 東京電力鉄塔建替工事
調査期間 2013年7月23日～8月22日
調査面積 39 m²

1. 遺跡の立地

川尻中村遺跡が所在する相模原市は328.8 km²あり、沖積低地から数段の段丘面を有する台地・丘陵、そして険しい山地と様々な地形環境をもっている。周知されている遺跡数は500カ所を優に越え、その多くは大小の河川流域に確認されている。

本遺跡は、相模原台地北西部の標高138.00～142.00mの田名原段丘面にある縄文時代中期の環状集落である。周辺地形は南流する相模川に沿って北から南へ緩やかな傾斜をなしている。遺跡は相模川左岸段丘上に位置し、東西250m・南北400mと南北に長い。本遺跡の北側にある谷津川により開析された谷を隔てて、敷石住居や環状列石等が確認された「国指定史跡川尻遺跡」が存在する。そして西側の相模川対岸には原東遺跡が位置する。これらはいずれも本遺跡と相互に関連して営まれた縄文時代中期の集落跡であり、この地域が有力なセトメントを形成していたことを強く窺わせる。この他、相模川の上流域には太井寺遺跡、原西遺跡があり、下流域側には大島上ノ原遺跡、相模原市No.104遺跡などの集落が分布する。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は東京電力株式会社の「都留線No.247～No.255鉄塔建替工事計画」に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

本遺跡は、過去4地点で約8,072m²を対象に調査が実施されており、縄文時代中期後半の環状集落が確認されている。今回が5地点目の調査であるが、調査面積は39m²で、鉄塔直下の非常に狭小な範囲が対象となった（第2図）。

発掘調査は7月22日に調査区の設定及び資機材等を搬入し、翌23日から表土掘削を開始した。調査範囲が狭小で残土置き場が限られたため、西側をA区、東側をB区に分けて実施した。その結果、勝坂式期住居3軒と加曾利E式期住居1軒、土坑3基を検出し、8月22日に全ての調査を終了した（第3図）。

3. 調査の概要

調査区の標高は138.72m～139.10m付近に

あり、東から西方向に緩やかに傾斜している。

調査区に鉄塔が存在していたために、その折の掘削工事の攪乱が認められたが、基本的にほぼプライマリーな堆積であり、縄文時代の竪穴住居跡4軒・土坑3基が検出され、縄文時代中期を中心とした土器、石器がコンテナにして19箱出土した。以下、主要遺構について概要を述べる。

第1号住居跡(SI 1)の平面形は不整形を呈し、確認した掘方規模は長軸4.25m・短軸2.39m・深さ0.49mである。床面には川原石を使用して作られた石囲い炉と、その傍らに石皿が設置されたままの状態で発見された。周溝は確認されたが柱穴は明確には確認できなかった。遺物は中期後半の深鉢などの土器や打製石斧などの石器が石囲い炉直上を中心に多量に出土した。(写真2、3、11)

第2号住居跡(SI 2)の平面形は円形と思われる。確認した掘方規模は長軸3.51m・短軸2.18m・深さ0.84mである。付帯施設として柱穴3基、壁柱穴6基、周溝を確認した。遺物は中期前半の土器を中心に出土した。なお、柱穴覆土直上からは「顔面把手」が出土した。顔面は隆線で表現され、眼は「アーモンド・アイ」が透し彫りされている。両眼の位置は水平ではなく、頭頂から垂下する隆線に対してやや左さがりに傾く。髪型は蛇行する一本の粘土紐で現されている。頭頂部は矢羽状の刻み目が施されるといった特徴を持つ。(写真4、5、12)

第3号住居跡(SI 3)の平面形は円形と思われる。確認した掘方規模は長軸3.27m・短軸2.90m・深さ0.36mである。付帯施設として石囲い炉、ピット5基、硬化面、周溝を確認した。北側周溝は第4号住居跡と共有している事から、本遺構は第4号住居跡を元に拡張・改築を行ったものとみられる。遺物は中期前半の土器や石器を中心に出土した。また、長さ11.75cm×幅14.96cm×厚

さ9.98cm、重さ1.6kgの黒曜石の大型石核も床面直上より出土している。(写真7、8、13)

第4号住居跡の平面形は円形と思われる。確認した掘方規模は長軸3.27m・短軸2.66m・深さ0.12mである。直上に第3号住居跡が構築されている為に床面以下の残存部から、付帯施設として埋甕炉、ピット6基、硬化面、周溝を確認した。埋甕炉に利用された深鉢には動物をモチーフにした意匠文が描かれている。遺物は中期前半の土器や石器を中心的に出土した。(写真9、10、14)

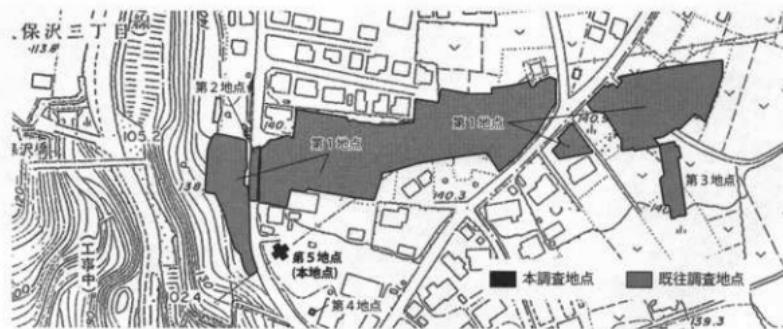
4.まとめ

わずか39mという狭小な範囲が調査対象であったが、予想以上の遺構と多量の遺物を検出できた。

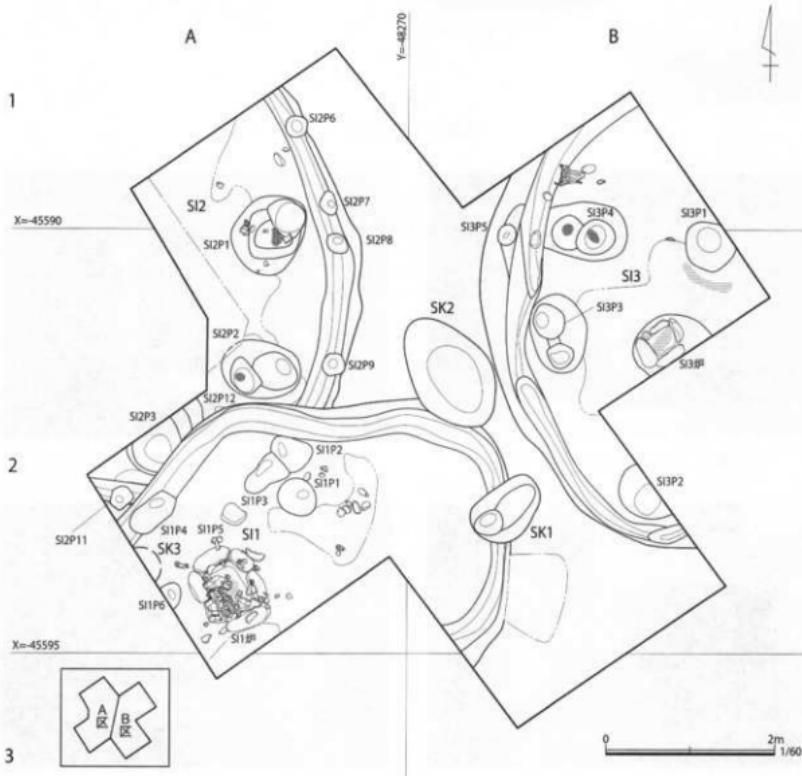
本遺跡の範囲は南北方向に長く、台地上の平坦部に東西約250m・南北約400mの規模で広がるものと想定されている。本地点は集落の南西部に位置すると思われるが、今回の調査で、環状に巡る住居跡群が崖線手前で弧状に南下し、本地点から南東方向へと展開する様相が若干窺えた。

本調査では縄文時代中期の竪穴住居跡が4軒検出され、うち2軒は石囲い炉を、1軒は埋甕炉を有していた。遺物は縄文時代中期のものを中心に多量に出土したが、特に第2号住居跡出土「顔面把手」は本遺跡初の出土例であり注目すべき遺物である。

今後、集落の北・南域の調査事例が増えれば、より詳細な集落様相が明らかになっていくとともに、他遺跡との関わりの姿を描くことができると思われる。



第2図 遺跡の調査地点 (1/2,500)



第3図 遺構全体図 (1/60)



写真1 A区全景

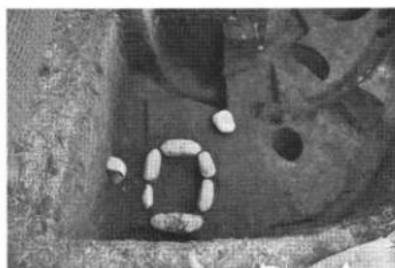


写真2 第1号住居跡 完掘状況



写真3 第1号住居跡 炉 遺物出土状況



写真4 第2号住居跡 完掘状況



写真5 第2号住居跡 遺物出土状況



写真6 B区全景

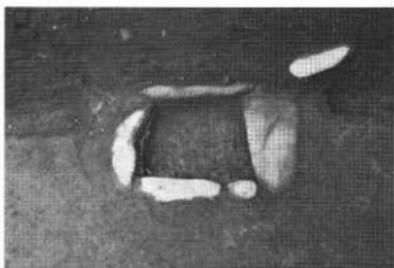


写真7 第3号住居跡 炉 完掘状況



写真8 第3号住居跡 遺物出土状況



写真9 第4号住居跡 掘方完掘状況



写真10 第4号住居跡 炉 遺物出土状況

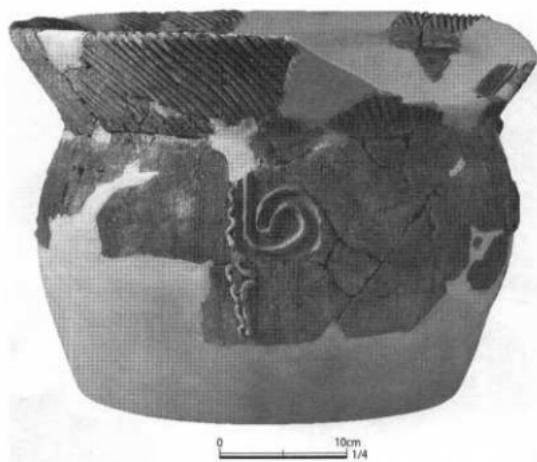


写真11 第1号住居跡 炉 出土土器

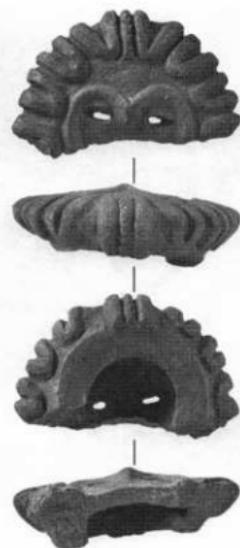


写真12 第2号住居跡 出土土器

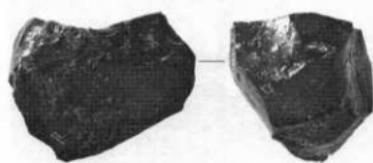


写真13 第3号住居跡 出土土器・石核



写真14 第4号住居跡 炉 出土土器

横須賀市 船久保遺跡

－縄文時代早期前葉の陥し穴群と弥生時代住居跡の調査－

戸田 哲也

所在地	横須賀市林5-1646-2外
調査機関	株式会社 玉川文化財研究所
調査担当	小林晴生・前川昭彦
調査原因	県道26号（横須賀三崎）三浦縦貫道路
調査期間	2013年4月23日～10月21日
調査面積	3,646 m ²

1. 遺跡の立地

船久保遺跡は、神奈川県の南東部に張り出す三浦半島ほぼ中央部の西海岸域に位置しており、遺跡西側に広がる相模湾を眼下に望む標高30～40mのゆるい起伏の続く丘陵上に位置する。晴れた日には相模湾越しに北側から江ノ島、大磯丘陵、大山・丹沢山地、箱根、伊豆半島が一望され、正面の箱根山の背後には富士山が遠望される。

調査地点は武山（標高200m）の南西側、小和田湾に面する丘陵部に在り、北側の身洗川と南側の川間川により開析された樹枝状に延びる丘陵の緩斜面と、ゆるい谷戸地形を呈する（標高31m～37.5m）範囲となる。今回の調査地区を含む丘陵上は縄文時代、弥生時代に属す船久保遺跡として周知されている。

2. 調査に至る経緯と調査成果

調査は県道26号（横須賀三崎）三浦縦貫道路Ⅱ期の事業予定地の一部にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地である横須賀市No.387（船久保遺跡）が含まれることから、神奈川県教育委員会によって、平成24年2月および7月に試掘調査が行われ、その結果を受けて本調査を実施したものである。



第1図 調査位置図(1/50,000)

発掘調査は玉川文化財研究所によって、平成25年4月23日から開始した。調査は谷戸地形のゆるい凹み地を中心に斜面上方の1区、斜面下方の2区、さらに1区の東拡張区、西の飛び地状の3区に分け、合計3,646 m²の調査を行った。現地調査は平成25年10月21日に終了し、引き続き整理・報告書作成作業に入り、平成26年3月25日に発掘調査報告書を刊行した。

3. 調査概要

(1) 古代～近世

1、2区の表土層直下からは溝状構造8条、段切り状構造3箇所、土坑25基が検出され、3区では同じく溝状構造1条、土坑2基が検出された。これらの遺構は構造より出土した遺物から見て江戸期以降の形成時期が推測され、畑などの農業用関連構造と考えられる。また3層を覆土とする円形土坑が7基検出された。堆積土から見て古代に属する可能性が推測される。

(2) 弥生時代

3区において弥生時代後期前葉に属す竪穴住居址2軒（Y1号、Y2号）が検出された。Y1号、Y2号とともに胸張りをもつ隅丸方形プランを呈し、Y1号は短軸5.08m、長軸は約半分の4.6mが残っており、Y2号は長軸7.1m、短軸6.2mを測り完存していた。

(3) 繩文時代

縩文時代の遺構は1、2区のVII層中より陥し穴20基、土坑2基、ピット83穴が検出された。

さらに1区北側のVII層を主体包含層として、谷戸西側肩部から谷戸底部に向けて30m×30mの範囲に、土器片、石器類、大小の礫が密集する遺物集中区を検出した。土器片、礫片の接合関係からまとまりをもった一括性廃棄として捉えられ、「捨て場遺構」として呼称されるものである。

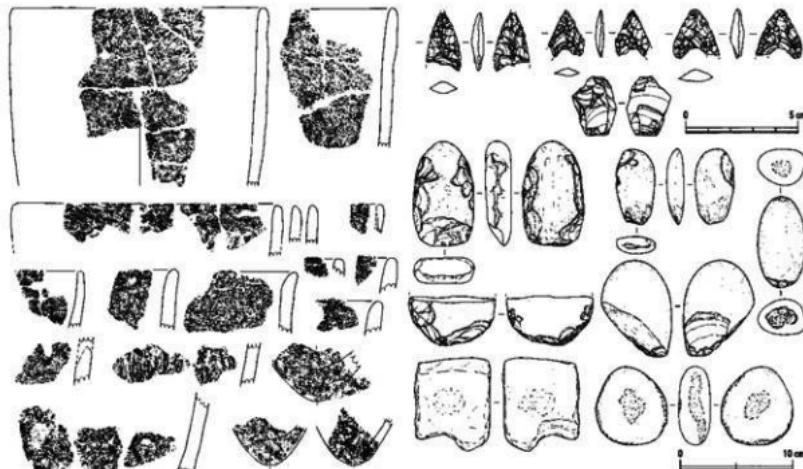
出土した土器群は縩文早期初頭の無文土器群に属すものであり、平坂式の前段階となる大浦山II式土器である。軽しおな胎土をもつことが特徴的であり、胎土の緻密さにより脆い厚手の類と堅

い薄手の類がある。なお押型文土器を伴出しないことが特徴的である。

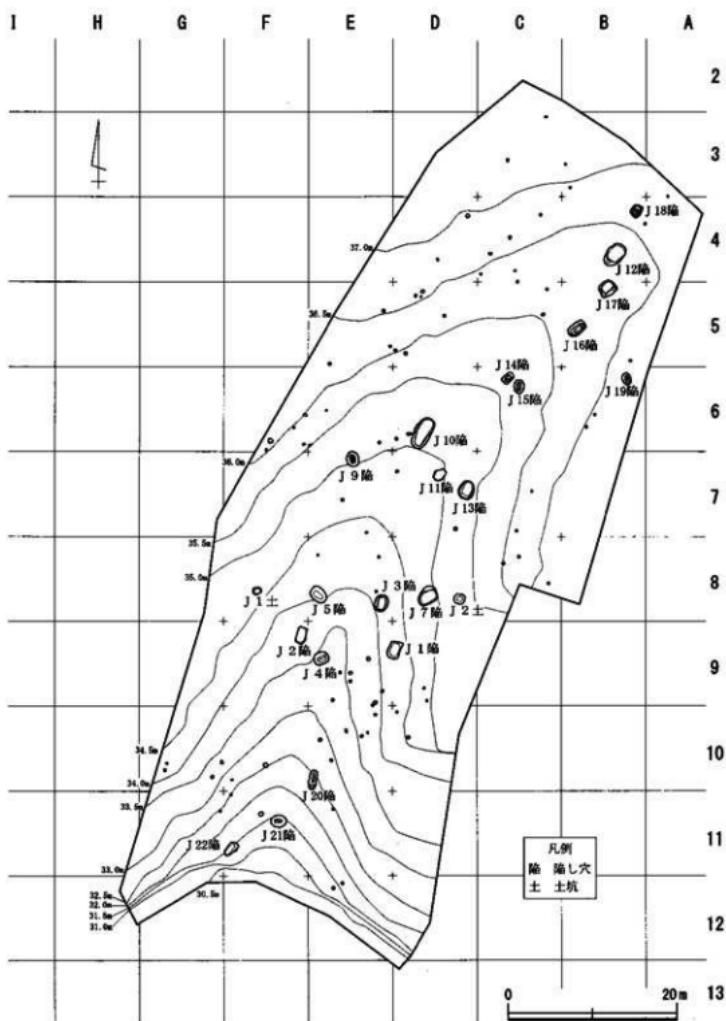
石器類も共存する状態で出土しており、第2図に示した本遺跡の遺物類は、類例の少ない大浦山II式を代表する資料の一つとなるものである。

発見された20基の陥し穴群は大浦山II式期に属することが明らかなものであり、現在のところ時期の確定できる縩文時代陥し穴の検出例としては最も古い段階の事例の一つとなるものである。

谷底を上下に90mの長さにわたって分布する陥し穴は、底部形態の差異、主軸方向の差異はあるものの、一連の配置設計を考えさせる。ただし陥し穴の形態分類から見て、底部ピットをもつタイプのものは谷筋の上下2ヶ所に分枝した状況で分布しており、この初期配置を継続的に利用した形で、谷筋の上一連の分布配置へと作りあげていった過程が推定される。なお時期的に多少下るが、横須賀市高原北遺跡（三戸式期）の陥し穴群も谷底を中心に配置されており、その共通性が注目されるところである。



第2図 船久保遺跡出土遺物（大浦山II式期）



第3図 船久保遺跡1・2区縄文時代遺構配図図(1/600)



写真1 船久保遺跡3区弥生時代住居址全景



写真2 船久保遺跡1・2区縄文時代陥し穴全景

みややまなかざと 寒川町 宮山中里遺跡 —相模川東岸下流域に展開する弥生時代の環濠集落—

いせき ふみあき
井関 文明

所在 地 高座郡寒川町 3,443 外
調査機関 公益財団法人かながわ考古学財団
調査担当 井関文明・三瓶裕司・脇 幸生・
 誠訪間直子・高橋 香・馬瀬和雄・
 梅川光隆・瀬田哲夫・菊川英政
調査原因 一般国道 468 号（さがみ縦貫道路）
 建設
調査期間 2013 年 4 月 1 日～ 2014 年 3 月 31 日
調査面積 2,360 m² (全体は 3,197 m²)



第 1 図 調査位置図 (1/50,000)

1. 遺跡の立地

宮山中里遺跡は、JR 相模線宮山駅の北方 0.5 km 程に位置する寒川町宮山地区に所在しています。また遺跡は町域を南流する相模川東岸の自然堤防に立地しており、遺跡立地面の標高は 10 ~ 11 m を測ります。

本遺跡ではこれまでに一般国道 468 号（さがみ縦貫道路）寒川北インターチェンジ建設事業に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期の環濠集落や古墳時代後期の前方後円墳、近世の堤防関連遺構などが発見され、弥生時代から近世の相模川東岸下流域における貴重な調査事例となっています。

2. 調査に至る経緯と調査成果

今回の宮山中里遺跡（寒川町 No.27）の発掘調査は、平成 16 年度から一般国道 468 号（さがみ縦貫道路）建設事業に伴う寒川町倉見地区埋蔵文化財発掘調査として実施されてきたものです（第 1 図）。当該事業に伴う寒川町域の発掘調査は、

国土交通省関東地方整備局横浜国道事務所の委託を受けた公益財団法人かながわ考古学財団が、本遺跡と倉見川端遺跡、倉見川登遺跡の 3 遺跡で実施してまいりましたが、今回報告いたしますのは、平成 25 年度に調査を実施した弥生時代の遺構と遺物が発見された宮山中里遺跡の 2 地点分のみの調査の概要です。平成 25 年度の宮山中里遺跡の調査は「宮山中里遺跡・倉見川端遺跡」の調査として実施し、西側調整池・排水路地区 (1,045 m²)、調整池② (A + B)・③地区 (1,315 m²) の 2 地点は合計で 12 ヶ月の期間を費やしました（第 2 図）。

3. 調査概要

(1) 近世

近世に帰属する遺構は、堤防跡 1 箇所、土坑 4 基、溝 14 条、畝 1 箇所が発見されました。堤防跡は近世後期の所産で、付近ではそれに関連すると考えられる土坑も発見されております。



第2図 寒川町 宮山中里遺跡平成25年度調査地点（1/10,000）

(2) 中世

中世に帰属する遺構は、掘立柱建物跡1棟、ピット列1列、ピット250基、井戸跡4基、溝26条、畝2箇所、土坑23基、礫集中1箇所が発見されました。遺物は、井戸跡や溝、土坑などより舶載磁器、国産陶器、かわらけ、鉄鎌、砥石などが出土し、13世紀代～14世紀代のものが主体を占めることから、遺構はその頃の時期に形成されたと考えられます。

(3) 奈良・平安時代

奈良・平安時代に帰属する遺構は、溝1条が発見されました。

(4) 古墳時代

古墳時代に帰属する遺構は、後期古墳2基の周溝が発見されました。

(5) 弥生時代

弥生時代の遺構は、環濠を含む溝5条、竪穴住跡3軒、方形周溝墓1基、畝3箇所、土坑3基が発見されました（第3・4図）。このうち環濠と竪穴住跡は西側調整池・排水路地区、方形周溝墓と畝は調整池②・③地区、土坑は西側調整池・排水路地区に分布するのが確認されました。

環濠は弥生時代の竪穴住跡の周りをめぐっていいる溝で、外敵からの防衛を目的として掘られたのではないかと考えられております。環濠からは弥生土器を含む遺物が多く出土し、竪穴住跡と方形周溝墓からも弥生土器の破片を含む遺物が少しですが出土しました。竪穴住跡（1～3号住）はいずれも近世の溝によって床面まで擾乱されて

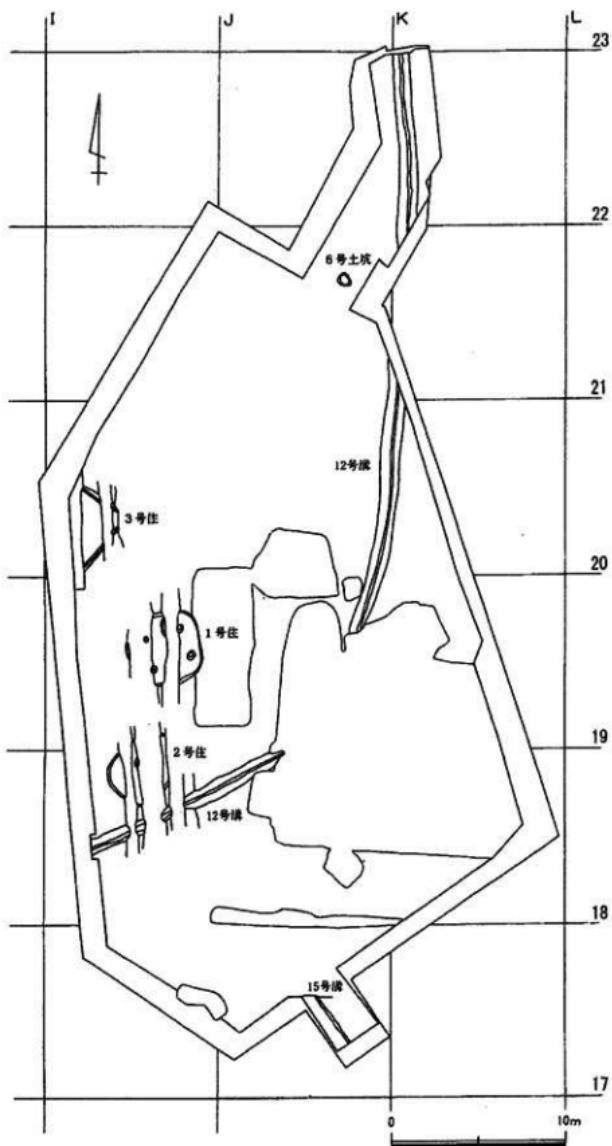
いましたが、炉が検出されたもの（1・2号住）や柱穴が掘り込まれているもの（1号住）が明らかになりました。方形周溝墓は周溝の東側が発見されましたが、主体部は検出されませんでした。畝は方形周溝墓よりも古い遺構であることが遺構の切り合い関係から判明しました。溝は幅の広い溝と狭い溝が発見されました。土坑は散漫に分布している状況がうかがえました。

環濠と竪穴住跡、方形周溝墓から出土した弥生土器は弥生時代後期の時期の所産と考えられます。

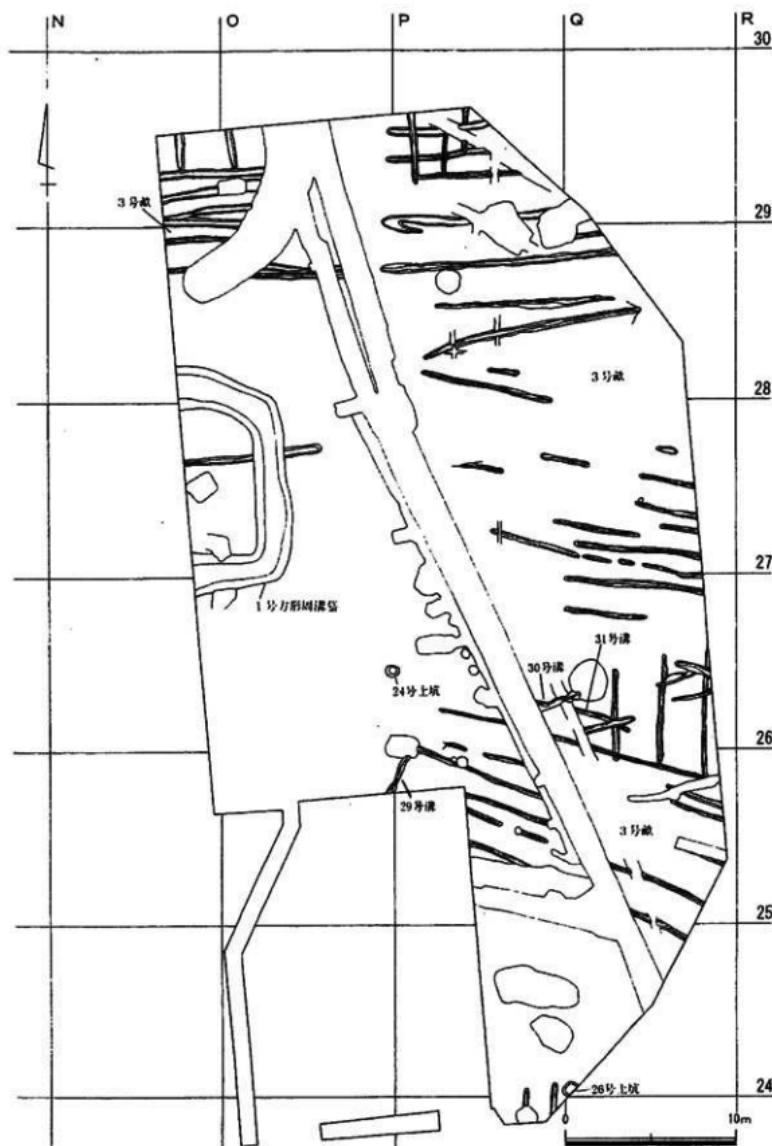
4.まとめ

今回の調査により、宮山中里遺跡の弥生時代から近世までの概要を遺構や遺物により確認することができました。その中でも本遺跡の環濠集落は、環濠のめぐる内側の竪穴住跡と外側の方形周溝墓が分布の上で異っているというあたり方がより明らかになることで、居住域と墓域が画然と分離している状況が把握されました。本遺跡の環濠集落において環濠と竪穴住跡、方形周溝墓がいずれも弥生時代後期を中心とする時期に形成され、環濠がめぐる南北間の距離が約80mである（第5図）ということなどが今回の調査の結果、うかがえました。

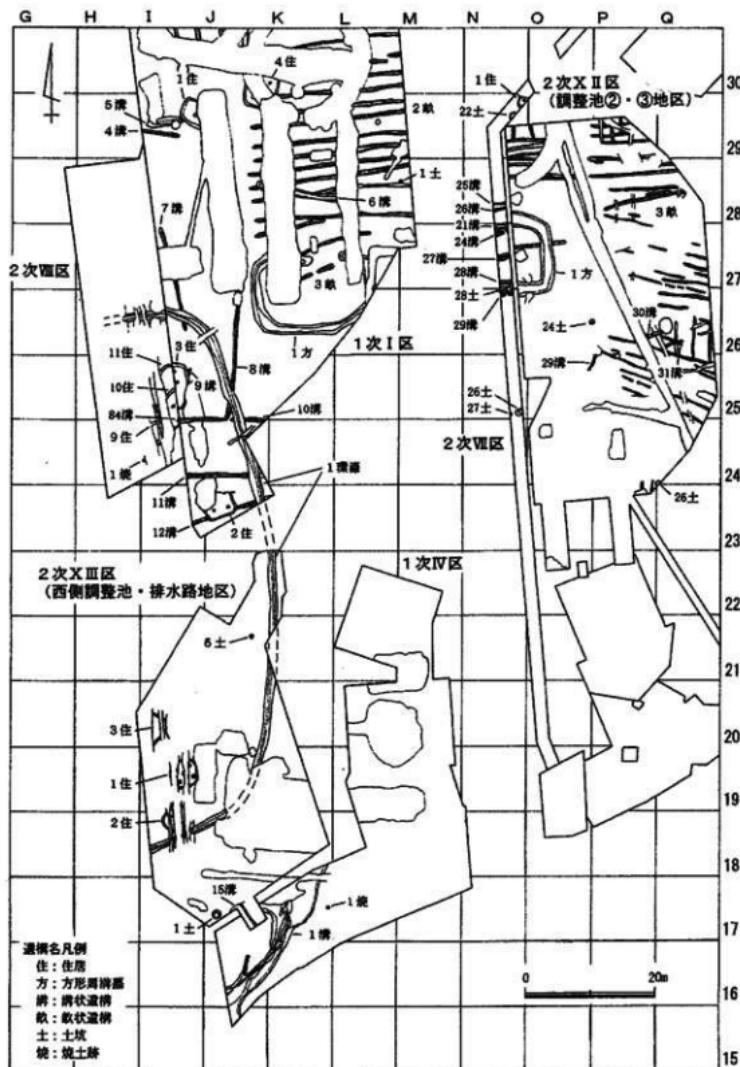
今後は、本遺跡における弥生時代の環濠集落について、それに関係する遺構や遺物を詳細に検討することで集落構造を明らかにすることが課題として残されました。



第3図 宮山中里遺跡 西側調整池・排水路地区弥生時代面全体図（約1/300）



第4図 宮山中里遺跡 調整池②・③地区弥生時代面全体図 (約1/300)



第5図 宮山中里遺跡 環濠集落概要図 (約 1 / 800)

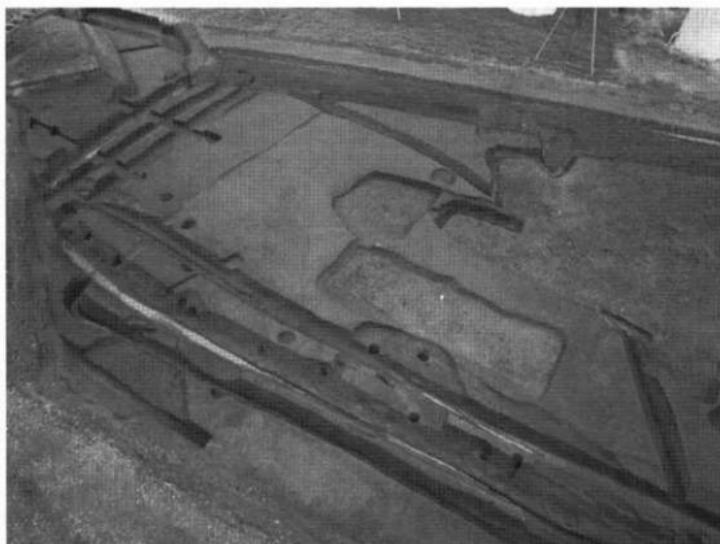


写真1 宮山中里遺跡（西側調整池・排水路地区）環濠集落全景（南西から）



写真2 西側調整池 環濠遺物出土状況（南西から）



写真3 排水路 環濠遺物出土状況（南西から）

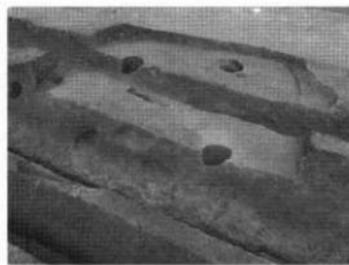


写真4 西側調整池 1号竪穴住居跡（南西から）

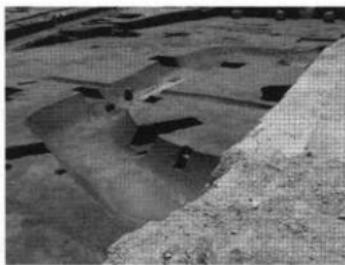


写真5 調整池②地区 方形周溝墓（北西から）

横須賀市 矢ノ津坂遺跡（平成 25 年度調査）

－戦略的要所に位置する集落－

たむら よしてる
田村 良照

所在地	横須賀市浦賀 1-9-5 他
調査機関	有限会社 吾妻考古学研究所
調査担当	田村良照
調査原因	宅地造成
調査期間	2013年10月10日～11月26日
調査面積	約1,000 m ²

1. 遺跡の立地

本遺跡は三浦半島東端の観音崎に程近い、東京湾に面した丘陵上に立地し、京浜急行馬堀海岸駅の南東約200mに位置する。この丘陵は南北約180m、東西約90m、標高50mを測るもので、周囲に展開する丘陵に比して12～15m程高いことから、一見すると独立丘の景観を呈している。

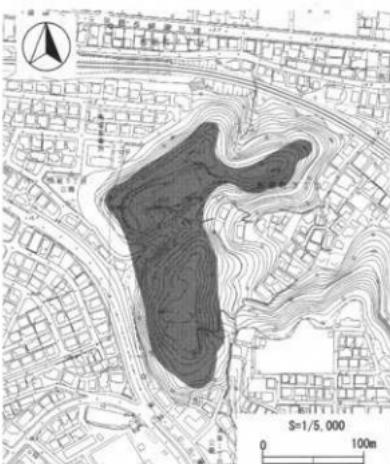
北側には東京湾を挟んで房総半島を眺望でき、東側の丘陵上に建つ防衛大学校は目と鼻の先に望むことができる。また丘陵の西側をかすめて浦賀港から東京湾方面に抜ける県道208号線が走っている。この道路は古くからの主要道であり、本遺跡の下が峠となっていて、「矢ノ津坂」という地名の由来となった。

2. 調査に至る経緯と調査経過

横須賀市史によれば、昭和33（1958）年に矢ノ津坂の工事中に採取された須恵器・土師器・弥生土器などが赤星直忠のもとに届けられ、踏査を経て、矢ノ津坂土師遺跡として周知されたという（中村2010）。その後、旧日本道路公団の横浜横須賀道路（佐原～馬堀海岸間）の延伸工事に伴って、平成14年（2002）に神奈川県教育委員会による試調査、平成16～17年（2004～

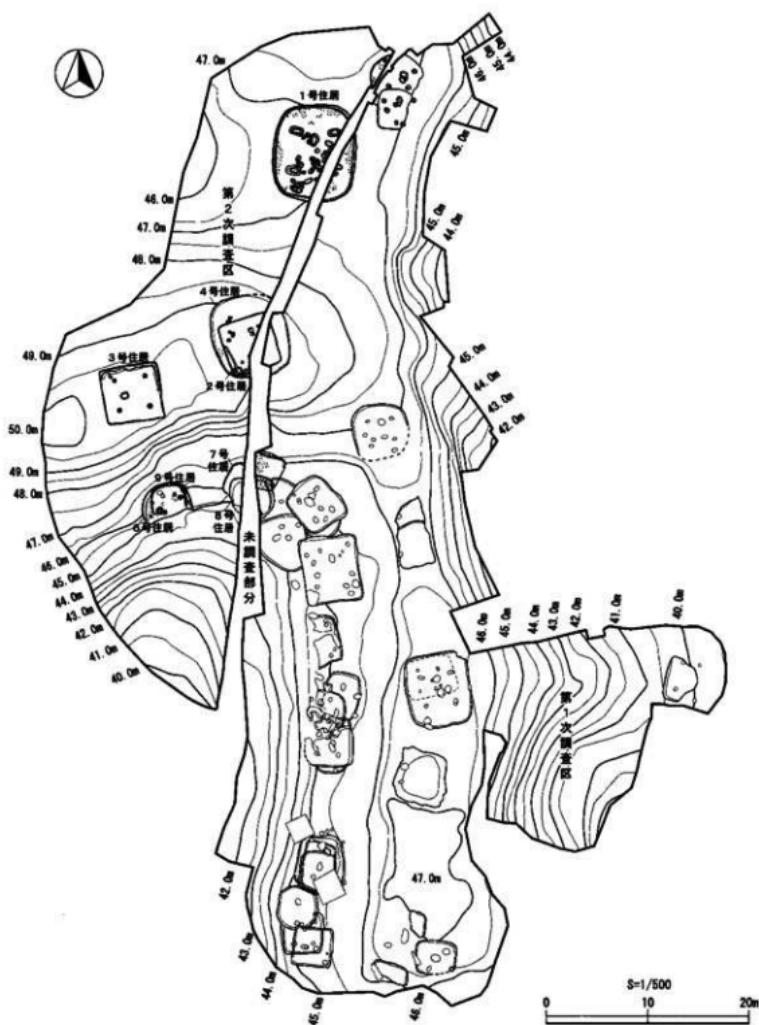


第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡の位置と地形

2005）にはかながわ考古学財団が本格調査を実施し、弥生時代～古代集落址（竪穴住居址32軒）



第3図 遺構分布図

の存在が明らかになった（新聞・吉田 2006）。

今回の調査は横浜横須賀道路の工事にかからず、に残されていた丘陵東側部分を対象に行われ、平成 19 年（2007）に横須賀市教育委員会による試掘調査で集落址の続くことが確認されたことから、平成 25 年（2013）に本格調査の運びとなったものである。尚、結果的に二度の本格調査は同一遺跡を分割して行ったことになるので、かながわ考古学財団による調査を第 1 次調査、今回調査を第 2 次調査と命名した次第である。

第 2 次調査は平成 25 年 10 月 10 日に開始した。横須賀市教育委員会から指定された調査範囲内には伐採した原生林の切り株が 100 個以上も放置されており、調査はまずこれらの抜根作業と表土掘削から着手することになり、遺構検出までに予想以上の時間を要してしまった。また廃土を場外搬出できなかったことや、二度の台風襲来で甚大な被害を受けたことも、調査進捗に大きな妨げとなってしまった。こうした想定外の障害もあったが、竪穴住居址 9 軒の記録を取り、11 月 26 日無事調査を終えることができた。

3. 調査の概要

弥生時代中期～古墳時代前期の住居址 8 軒と時期不明の住居址 1 軒が検出された。それらを時期別にみると、弥生時代中期 4 軒、弥生時代後期 1 軒、古墳時代前期 3 軒、時期不明 1 軒の合計 9 軒となる。またこのうちの 5 軒は第 1 次調査で未完掘となっていた残りの部分に相当し、整理すると第 1 表のようになる。

このなかで 2 号住居址は、第 1 次調査で出土遺物に恵まれなかたことから奈良・平安時代に帰属するにされていたが、第 2 次調査で古墳時代前期であることが判明した。つぎに主要な遺構・遺物について取り上げてみたい。

大型住居址

弥生時代中期後葉の 1・4 号住居址の 2 軒は大

	第 2 次調査	第 1 次調査
弥生時代中期	1 号住 4 号住 5 号住 6 号住	Y 15 号住 Y 16 号住 Y 14 号住 —
弥生時代後期	7 号住	Y 15 号住
古墳時代前期	2 号住 3 号住 9 号住	H 1 号住 — —
時期不明	8 号住	—

第 1 表 竪穴住居址対応表

型住居址であることが明らかになった。1 号住居址は長軸 9.46 m × 短軸 7.5 m を測り、本集落址で最大規模を誇る。主柱穴は 1.3 m × 0.75 前後の長方形を呈する大きなもので、残存する柱痕より「五平柱（ごひらばしら）」の用いられていたことが分かった。また壁際の床面上に夥しく焼土が堆積し、そのなかから多くの土器が出土した。さらに板状鉄斧、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、小型磨製石斧各 1 点が出土するなど、豊富な遺物を伴っていた。

4 号住居址も長軸 8.04 m × 短軸 7.55 m を測る大型住居址である。古墳時代前期の 2 号住居址と重複するため約半分は失われているが、床面上から良好な土器類が出土した。

舟形土製品

2 号住居址 Pit 4（貯蔵穴）脇の床面より若干浮いた位置から準構造船の土製品 1 点が出土した（写真 7）。準構造船は ^{くわくせう} 划舟（丸木船）の上に側板や棚板を付けて積載量を増やした構造をもつ弥生～古墳時代に特徴的な古代船である。出土した土製品は舷側部分が一部欠損しているものの、準構造船のつくりを忠実に模している。長さは 8 cm 強を測り、船首・船尾と舷側板にあたる部分が穿孔

されているので、吊るして携帯したか祭祀に用いられたものと考えられる。ちなみに準構造船を模した土製品の出土は本県で初めてである。

4.まとめ

二度の本格調査で矢ノ津坂遺跡が弥生時代中期～古墳時代後期に営まれた集落址であることが明らかになった。全体では竪穴住居址が35軒発見されたが、時期別にみると、弥生中期9軒、弥生後期8軒、弥生末～古墳初頭5軒、古墳前期7軒、古墳中期4軒、古墳後期1軒、時期不明1軒という内容である。したがって一時期10軒に満たない小規模な集落が、一時的な段絶はあったものの、弥生時代中期から古墳時代後期までくり返し営まれたといえる。

このような小規模な集落が険しい丘陵上に何故に形成されたのか、その答えは丘陵頂部に立つと分かるような気がする。すなわち本遺跡から北側に東京湾を挟んで房総半島が一衣帶水の関係にあり、浦賀水道の渡航点である走水は本遺跡から東

方約1.5kmに位置している。また前述のように、丘陵西側には浦賀から東京湾方面に抜ける現在の県道208号線が走り、古来より交通の要衝であったことが知られている。こうした立地条件のなかに営まれた集落が通常の集落であったとは考えられない。第1次調査のY20号住居址（弥生中期）から環状石斧1点、さらに第2次調査で2号住居址（古墳前期）から舟形土製品1点が出土したが、ともに祭祀的色彩の強い遺物である。こうした特殊な出土遺物も本遺跡の性格を物語っているものといえよう。

文献

新聞基史・吉田政行 2006『矢ノ津坂遺跡』

かながわ考古学財団調査報告 198

中村 勉 2010「第2章第1節 矢ノ津坂遺跡」

『新横須賀市史』別編・考古



写真1 東京湾・房総を遠望



写真2 1号住居址遺物出土状況①



写真3 1号住居址遺物出土状況②

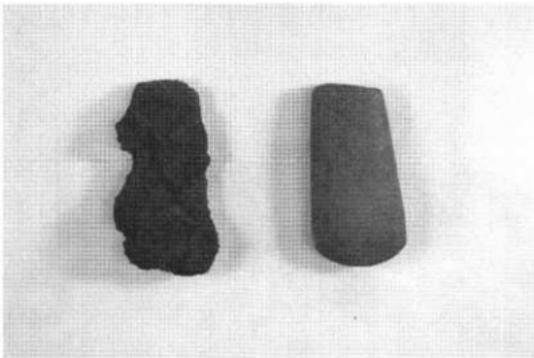


写真4 1号住居址の石斧・鉄斧

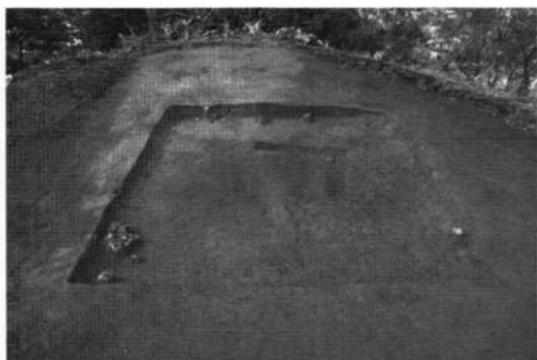


写真5 3号住居址遺物出土状況



写真6 2・4号住居址遺物出土状況

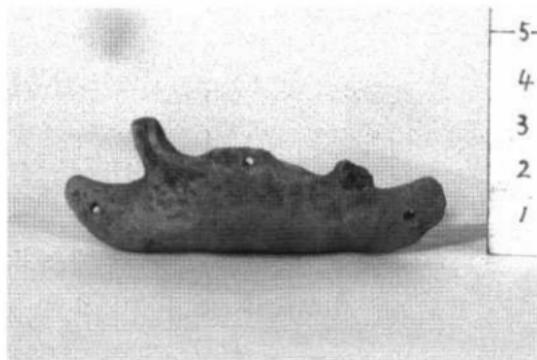


写真7 2号住居址の舟形土製品

三浦市 雨崎洞穴

—三浦半島の弥生黎明期を告げる洞穴遺跡の調査—

なかむら つとむ
中村 勉

所在地 三浦市金田字勝谷

調査機関 横須賀考古学会

調査担当 赤星直忠・浜田勘太・岡本 勇

調査原因 学術調査

調査期間 1967年7月26日～1968年4月1日

調査面積 108 m²

1. 遺跡の立地

雨崎洞穴は東京湾西岸部の金田湾南端部に位置し、「勝谷」と呼ばれる浸食谷の貫入によって生じた東西小台地東側の崖中腹に形成された洞穴である。その規模は小さく、入口部7m、奥行4m、高さ2.5m程の半円状をした洞穴で、岩陰と呼ぶべきかも知れない。

金田地区の雨崎洞穴から南東方向にリアス式の複雑な磯浜が続き、その南端部に松輪地区的間口洞穴群が存在する。海岸背後は一気に海蝕崖が起立し、標高50m前後の広大な海蝕台地が展開する。台地上には縄文早期から時期不詳の土師器片などが散布し、遺跡密度の高い地域となっている。

洞穴は弥生前期末から利用され、古墳時代後期の7世紀末にその利用を終える。周辺の遺跡を見て行くと、洞穴前面の砂丘に位置する勝谷遺跡がある。この砂丘遺跡からは洞穴と同時期の土器が採集され、さらに、洞穴内墳墓と同様の磯岩を用いた石組の石棺墓が4基程確認されている。また、洞穴直上の丘陵頂部には2基の墳丘状の高まりが認められ、1基は前方後方墳の様相を呈している。墳墓に関しては、洞穴のある海蝕崖に雨崎横穴群と呼ばれる横穴墓が開口している。この他、勝谷



第1図 勝谷遺跡（左）と雨崎洞穴（右）の位置
(1/10,000)

の谷には勝谷横穴群と呼ぶ横穴墓が認められる。

2. 調査に至る経緯と調査経過

横須賀考古学会は1962年から翌年にかけ、三浦市松輪の大浦山洞穴を調査した。調査開始の年、日本考古学協会は、「洞穴遺跡調査特別委員会」を立ち上げた。その設立理由として、旧石器文化と縄文文化との繋がり、縄文文化と弥生時代との繋がりの解明にむけ、洞穴遺跡の発見、全国分布、発掘による層序の決定、利用の状況を明らかにすることであった。大浦山洞穴はこのような特別委員会の目的を具現する意図を持って、調査された。この調査の成果として、洞穴利用の開始期が後期の久ヶ原期ではなく弥生中期後半の宮ノ台期であること、さらに洞内に埋葬された人骨に解体痕が認められ、鈴木尚は埋葬ではなく殺戮による行為がおこなわれたという推測を行っている。調査後赤星直忠は、弥生中期後半よりさらに古い時期の洞穴を調査することで、洞穴遺跡がどこまで縄文

時代に近づけるかを探ろうと考えた。標高が10mを超える、雨崎洞穴を候補とした理由は、標高の高さは離水時期の新旧を知る目安と考え、標高7m程の大浦山洞穴より雨崎洞穴が古いと予想したからである。調査は1967年7月に開始され、1968年4月まで、横須賀考古学会会員の有志が2年間に計36日かけ実施したものである。

3. 調査の概要

(1) 弥生時代

弥生時代の遺物は、洞穴内に厚く堆積するラミナ(片葉状累層)状の炭灰砂の互層や、洞内から洞外の斜面に向かって伸びる貝層(貝塚)から発見されている。遺物としては、土器をはじめ骨角器の未製品としての漁具(回転離頭鉈・ヤス・釣針・アワビ起し)や、2枚貝を利用した貝刃や貝輪(巻貝もある)、シカやイノシシの肩甲骨を利用したト骨がある。土器は貝層下の土層からは、弥生前期末から中期中葉の土器(条痕文多い)が、貝層下部から中期後半の土器、貝層上部からは後期の久ヶ原式土器が出土しており、層序の推移と土器の時期的変遷は一致している。

前期末土器の三浦半島における検出例は、逗子市桜山うつき野遺跡、池子遺跡旧河道に統いて3例目となる。また、中期初頭から中葉にかけての土器が貝輪や骨角器に伴って発見されたことは、この時期の人類活動を知ることが出来る例として貴重である。なお、発見された貝輪はすべて破損品あるいは未製品で、その数は僅に300点を超える。弥生時代における貝輪発見例としては、千葉県館山市の安房神社洞穴例を超える数と言える。さらに、骨角器に使用された材として鹿角が多い。洞穴に残された貝材や骨材から見て、弥生時代における洞穴利用は、交換を目的とした貝輪や骨角器の生産が行われていたことが窺われる。

(2) 古墳時代

古墳時代における生活址は見当たらず、前期末

から中期初頭に墓域が形成される。洞穴内から礫岩で囲まれた石棺状の石組から発見されており、埋葬骨や焼人骨とその灰などが一面に散在しどの墓に埋葬されたのか正確につかむことが出来なかった。同様に、須恵器および土師器さらには鉄鑓や玉類の副葬品なども、供獻された墓を特定できる例は少なかった。しかし、発見された副葬品の年代は7世紀末までに収まることから、この墓域が少なくとも4世紀末ないし5世紀初頭から7世紀末のおよそ300年間継続使用されていたことがわかる。埋葬施設で特徴的な例として、T33と呼ぶ幼児を埋葬した木棺である。木棺の例は三浦半島では初出であり、しかも舟状の形態を推測される点で、千葉県館山市大寺山洞穴の舟葬例などとの関連を想起するものがある。さらに、洞穴内に見られる礫岩の石組を石棺とみなす例は、半島内では長井佃廬遺跡や久里浜八幡神社遺跡での調査例がある。

埋葬に関して注目すべきは、火葬人骨の存在である。火葬人骨が発見される石棺では、石組に用いられた礫岩に被熱痕が認められ、ここでの火葬を推測させるものがある。7世紀代における火葬骨埋葬の例は、三浦半島では横穴墓からの7例があるにすぎず、普遍的な葬制とは言えない。しかも、同時期の洞穴遺跡の埋葬例をとっても、そのような例を見ることはない。したがって、ここでの葬制のあり方と周囲に見られる横穴墓との関係がどのようなものであったのか、解決すべき課題と言える。

4. まとめ

雨崎洞穴が調査されてから、46年が過ぎた。調査時に指揮をとった赤星直忠、浜田勘太、岡本勇らは、いずれも鬼籍に入ってしまった。しかも、46年ぶりに雨崎洞穴をまとめるにあたっては、散逸資料の収集、記録類の整理、遺物の再調査、遺構と遺物の整合調査など、多くの課題が山

積していた。

雨崎洞穴は横須賀考古学会としては、おそらく最後の学術発掘であった。1960年代後半は、日本の高度経済成長に伴う大規模調査が各地で実施されるようになり、行政内部の調査組織が地域の

発掘調査を実施するようになっていった。このようなかで、自らの地域の歴史を明らかにして行こうという民間の地域研究団体の意気込みと強固な目的意識を再発見出来たことは、大きな成果と言えるのである。



写真1 遺跡の遠景

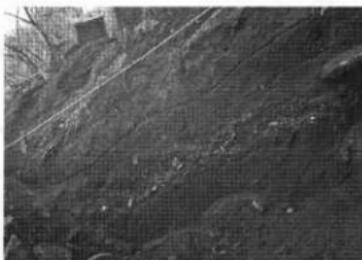


写真2 土層断面

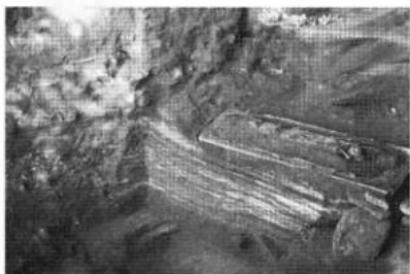


写真3 木棺とラミナ



写真4 木棺

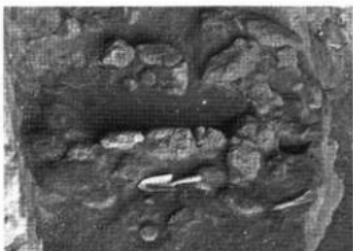


写真5 石棺

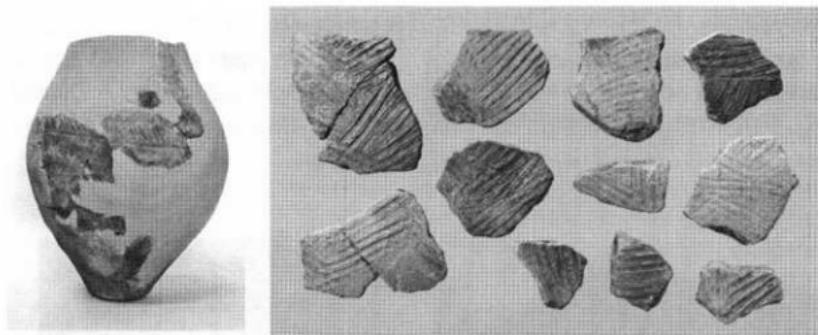


写真6・7 条痕文土器



写真8 各種玉類

写真9・10
丁字頭勾玉

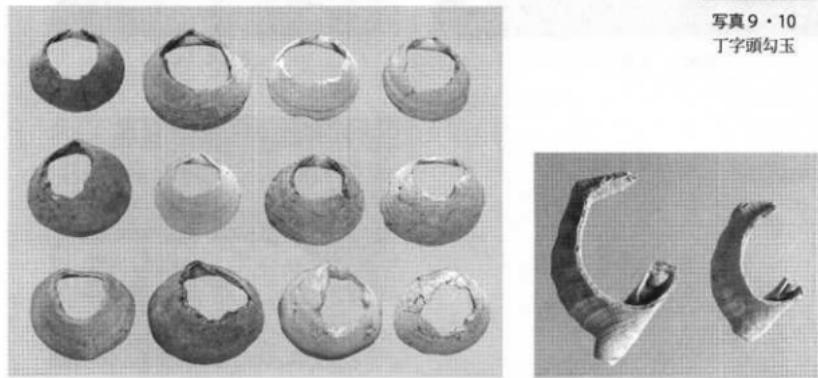


写真11 貝輪

写真12 貝輪

三浦市 勝谷遺跡

—砂丘につくられた墳丘を持たない墳墓群—

なかむら つとむ
中村 勉

所在地 三浦市金田字勝谷

調査機関 横須賀考古学会

調査担当 小川裕久・中村 勉

調査原因 学術調査

調査期間 2014年2月22日

調査面積 120 m²

1. 遺跡の立地

勝谷遺跡は、三浦市金田字勝谷に所在し、三浦市埋蔵文化財分布地図E 3-61「遺物散布地・古墳前期」と記載された遺跡である。標高7~9mの北西に傾きをもった砂丘地で、東西25m、南北10m程の範囲に遺物が散布している。砂丘西端側は畑地として開墾が進められ、採集された土器の多くが開墾時にこの砂丘断面から露出したものである。その断面直下、畑地に整地された面に沿って、人頭大およびそれよりも一回り大きな礫岩からなる石組を見ることが出来る。この石組は、砂丘が伸びる北西方向にほぼ列をなし、確認されたもので4基程が間隔をもって構築されている。砂丘と谷を挟んで標高30m程、東西75m、南北150mで中央が按部状に狭まりその幅はわずか25mとなる瓢箪状の地形をした丘陵が起立し、そのまわりには急峻な崖地が続く。雨崎洞穴は、台地の崖地中腹に開口する。砂丘と洞穴の距離は、わずか10m程にすぎない。この台地をめぐって洞穴、横穴墓群、高塚墳が存在し、その丘陵下に勝谷遺跡のある砂丘が位置している。これらの丘陵周囲の崖地に見られる墓の時期は不明であるが、何れも古墳時代後期に位置づけ出来るとと思わ



第1図 勝谷遺跡（左）と雨崎洞穴（右）の位置
(1/10,000)

れ、勝谷遺跡とも関連して三浦半島における古墳時代の墓制の展開を知る貴重な地域と言える。

2. 調査に至る経緯と調査経過

勝谷遺跡が発見されたのは、1967年（昭和42）7月および12月に行われた雨崎洞穴第1・2次調査時に弥生時代後期の土器や古墳時代後期の土師器を洞穴前面の砂丘において採集されたことに起因する。雨崎洞穴を調査した赤星直忠は、これらの土器と洞穴内で出土した土器との関連から、この付近に洞穴を利用した人達の居住地が存在するとの認識をもった。その後、三浦市教育委員会による市域海岸部における遺跡分布調査が1990年（平成2）に行われ、勝谷遺跡において古墳時代前期に属する土師器を採集し、礫岩からなる石組の石棺状遺構の存在を発見した。しかし、遺構の時期および採集された土器の時期などについて詳細な発表のないまま今日に至っている。

雨崎洞穴の報告書作成にあたり、石組の石棺状

の遺構が雨崎洞穴内でも発見されており、5世紀前半から7世紀末までの時期の墓に見られる埋葬形態であることが理解できるようになった。さらに、類似する遺構が横須賀市久里浜八幡神社遺跡の砂丘上からも発見されており、閉塞石に碇石を用いるなど海との係わりが深い葬法と指摘されるに至った。このように礫岩を石棺状に組んだ墓が砂丘と洞穴で同時期に形成されたことは、この二つの遺跡がきわめて密接な関係を持つと同時に、砂丘と洞穴という「場」の違いがどのような意味を持つかという課題を投げかけている。このような問題を解決するため、横須賀考古学会では勝谷遺跡を単に砂丘遺跡だけに限定するのではなく、雨崎洞穴や周囲の古墳および横穴墓との関係も視野に入れ、勝谷遺跡群としてその歴史的変化がどのように「場」の違いに反映するのかを研究目的に掲げ、2014年から小川裕久会長を中心に基盤資料の収集を開始した。

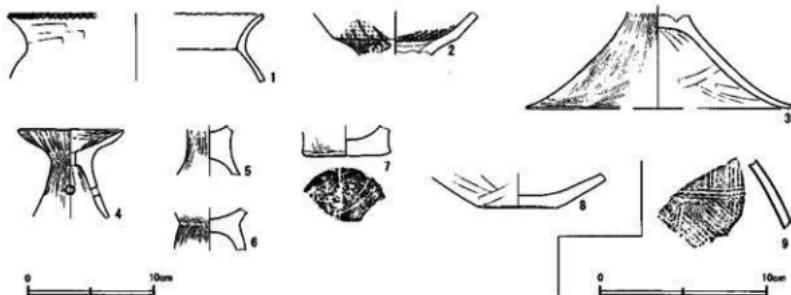
3. 調査の概要

横須賀考古学会では勝谷遺跡群の調査に当たり、遺跡の詳細な位置さらに横穴墓の正確な数、さらに勝谷遺跡の時期的幅を知るという基礎的な資料作りを第一に活動する方針を立てた。

民間の同好の士の集まりであるこの会の現状では、発掘調査は難しいものがある。そのため、発掘によらない継続的な考古学的調査を行い、基礎

資料の集積を目指す活動を行う必要がある。まず勝谷遺跡の時期を知ることが第一であり、そのため、表探された資料を活用することとなった。幸い雨崎洞穴の調査および海辺の遺跡調査などで、時期のわかる幾片かの土器が採集されており、それらを基に時期幅を探ることが出来た。さらに、砂丘に見られる石組の構造を知るために、現地での実測調査を行うことになった。

2014年2月22日に、横須賀考古学会会員有志による最初の現地調査が実施された。調査と言っても遺跡や遺構の現状変更を目的としたものではないので、写真および露頭している範囲での実測に留まり、石組の底に石が礫かれているのかなどの点は堆積土を排土することになるため、避けたことになった。そのため、今回の調査では底に石が礫かれているかを確認出来なかった。それでも、露頭している石組が4基あること、中には天井石を有するものなどがあることが判明し、これらの石組が石棺として構築されていた可能性を指摘出来るものとなった。それと共に、これらの石組に用いられている礫岩が凝灰岩や泥岩であることから、砂丘から露出している部分が風化しかなり脆くなっていることが気がかりとなった。さらに、砂丘の端部が畠地と接しているため、耕地の拡大によって石組が転石となって原位置から離れているものも見受けられた。そのことから、遺



第2図 勝谷遺跡の採集土器

跡の保護という活動も視野に入れた運動の必要性も生じてきた。一方、表採された土器から、幾つかの時期を知ることが出来た。弥生土器としては、櫛描きの縦区画をもつ土器片が発見されているが、これと同様なものが洞穴内からも発見されている。この手の文様を持つ土器は、三浦半島では希少でありそれが近接した位置から発見されたことは、砂丘と洞穴との関連の深さを示唆するものがある。この他にも、小型器台あるいは高杯など洞穴と類似する土器が発見されており、弥生後期から古墳前期までの幅を認めることが出来た。今のことろ古墳後期の土師器はないが、赤星が残した雨崎洞穴調査記録には砂丘から古墳後期の土師器を採集したことが記載されており、古墳後期の土師器が発見される可能性はある。

4.まとめ

勝谷遺跡が私たち地域研究者にとって注目される理由は、隣接する雨崎洞穴との関係にある。従来、海蝕洞穴遺跡はそれ自体で完結した遺跡として考究されてきた。しかし、その考えに大きな変

更を加えたのが、逗子市池子遺跡（旧河道）の調査であった。ここから出土した骨角器やト骨などは、洞穴遺跡で発見されるものと同じ内容のものであった。この結果、洞穴遺跡の利用およびそこで活動する人達と、他の遺跡との関連を明らかにする必要が生じてきた。今回、弥生時代に続く古墳時代の葬制のあり方において、洞穴以外の遺跡との類似性は、異なる「場」が決して閉ざされたものではないことを示すものといえる。その意味で、砂丘遺跡と洞穴遺跡あるいは集落との関係を総合的に考える必要がある。



写真1　遺跡の近景



写真2　遺跡の全景



写真3 1号石組



写真4 2号石組



写真5 3号石組



写真6 4号石組



写真7 調査風景

伊勢原市 伊勢原市No 163 遺跡

— 大山山麓で発見された石敷道路状遺構の調査 —

い　べ　かずのり
井辺　一徳

所 在 地 伊勢原市子易上粕屋地内

調査機関 公益財団法人かながわ考古学財団

調査担当 井辺一徳・後藤喜八郎・瀬田哲夫

塚田順正・馬淵和雄・渡辺 外

調査原因 新東名高速道路建設事業に伴う調査

調査期間 2013年5月16日～2014年3月31日

調査面積 1,800 m²

1. 遺跡の立地

伊勢原市 No.163 遺跡は、小田急小田原線伊勢原駅の北西 3.5km 程に位置する伊勢原市上粕屋地内に所在しています。伊勢原市北西端に位置する靈峰大山（標高 1,251.7 m）に源を発し、市域を南東流する鈴川の左岸段丘上に立地しており、遺跡立地面の標高は 97 ~ 98 m を測ります。

平成 25 年度は 4 地点（6 区・6 区北・6 区南・6 区東）の調査を実施しました。これらの調査区は鈴川左岸の低位段丘面に設定されたもので、調査区全域が鈴川の氾濫源にあたっていました。基盤層は厚く埋積する砂礫層で、古代以降に土壤化が始まり、中世以降に人の活動の痕跡が明瞭になるようです。

2. 調査に至る経緯と調査経過

伊勢原市 No.163 遺跡の発掘調査は、新東名高速道路建設事業に伴う事前調査として実施されたものです。当該事業に伴う伊勢原市域の発掘調査は、中日本高速道路株式会社東京支社厚木工事事務所の委託を受けた公益財団法人かながわ考古学財団が、平成 19 年 4 月に調査を開始した「西富岡地区」をはじめ、これまでに「上粕屋地区」、「東

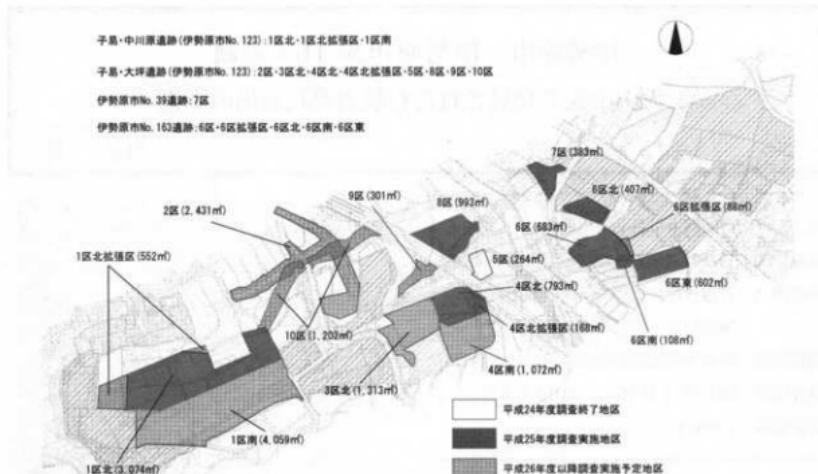


第1図 遺跡の位置図 (1/50,000)

富岡地区」、「栗庭地区」の 4 地区で作業を実施してまいりました。今回報告いたしますのは、平成 24 年 9 月より調査を開始した、伊勢原市北西域にあたる「子易地区」における調査の成果です。子易地区における事業用地内には、神奈川県教育委員会が実施した試掘調査により発掘調査の必要があると判断された 4 遺跡 18 地点の調査区が存在します。このうち、平成 25 年度は、子易・中



写真1 伊勢原市No 163 遺跡遠景（南東から）



第2図 子易地区埋蔵文化財発掘調査 調査区配置図 (1/4,000)

川原遺跡（1区北：約3,074 m²）、子易・大坪遺跡（4区北・4区北拡張区・8区：約1,954 m²）、伊勢原市No.163遺跡（6区・6区北・6区南・6区東：約1,800 m²）、伊勢原市No.39遺跡（7区：383 m²）の9地点の調査を実施しました（第2図）。

3. 調査の概要

【伊勢原市 No.163 遺跡 6区の調査】

（1）近世以降

該期の遺構は、4箇所の水田跡とそれに伴う畦畔が発見されました。発見された水田跡は調査区全面に展開しており、複数枚が重畳していました。最上面のものは近・現代のもので、間層を挟み、その直下に宝永火山灰降灰以前の所産と考えられる水田跡が複数面存在していました。

遺物は、陶磁器、鉄製品、銭貨等が出土しました。

（2）中世

中世に帰属する遺構は、石敷道路状遺構1条、弧状石列2条が発見されました。基盤層となっている砂礫層直上に堆積する黒褐色土を確認面とするもので、これらの遺構の構築時期が本遺跡に

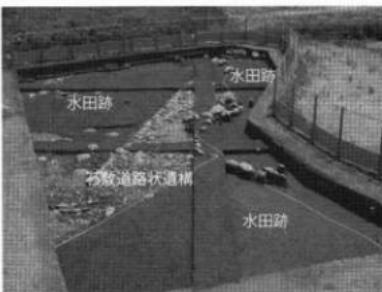
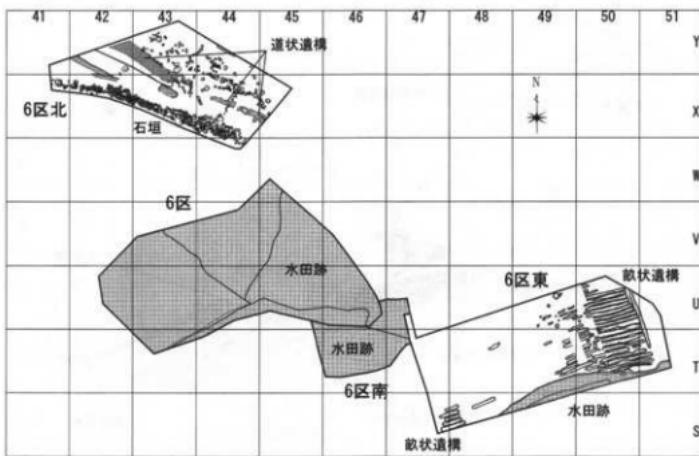


写真2 伊勢原市No.163 遺跡 6区近世面

おける人的活動の初現と考えられます。

石敷道路状遺構は、概ね東西方向に敷設された幅員3.6 m程の道路で、調査区内で延長23.8 m程が確認されました。大形の河原石を縁石として配し、路床に人頭大の河原石を敷き詰めた堅固なつくりとなっています。路盤・路床から出土した遺物の年代観から、13世紀前半～14世紀代に帰属するものと思われます。時期的にみると、鈴川を挟んだ右岸側の段丘面で発見された中世の屋



第3図 伊勢原市No 163 遺跡 6区・6区北・6区南・6区東 近世面全体図 (1/800)

敷跡（13世紀後半～14世紀）との関係性に十分に留意する必要があると思われますが、その特徴的な形態から、大山山麓につくられた寺社の参道の可能性も比定できません。

弧状石列とした遺構は、馬蹄形を呈する石列が2条併走するものです。積石状の構造をなしていますが、性格等は不明です。上述した石敷道路状遺構の下部からも継続部分が確認されていることから道路状遺構に先行して構築された構造物であることは明らかです。

遺物は、かわらけ、陶磁器、銭貨等が出土して

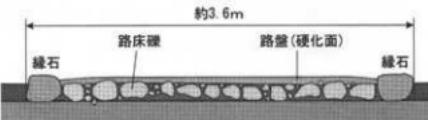


写真3 伊勢原市No 163 遺跡 6区中世面

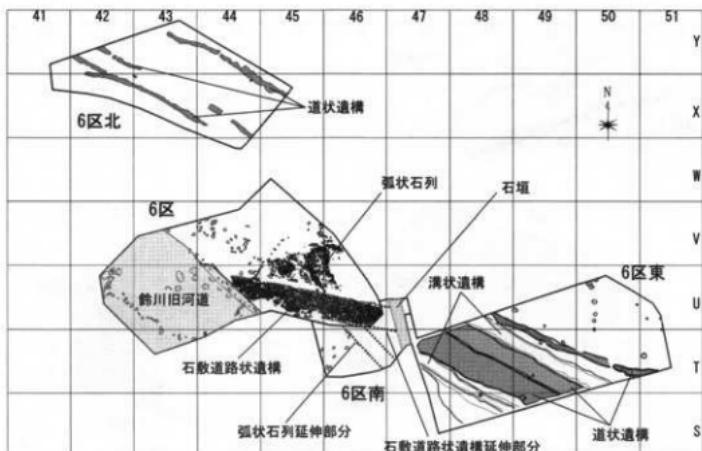
石敷道路状遺構



第4図 6区石敷道路状遺構・弧状石列 (1/200)



第5図 6区石敷道路状遺構 断面模式図



第6図 伊勢原市No.163遺跡 6区・6区北・6区南・6区東 中世面全体図(1/800)

います。

【伊勢原市 No.163 遺跡 6 区北の調査】

(1) 近世以降

該期の遺構は、道状遺構 4 条、溝状遺構 1 条、土坑 5 基、石垣 1(箇所) が発見されました。

道状遺構は、版築状に突き固められた厚い硬化面を有するものと、幅狭な硬化面のみが遺存していた駐状のものに大別されます。前者は概ね東西方向に敷設されたもので、大山道の旧道の可能性があると考えられます。後述する 6 区東で確認された北側の道状遺構に連絡するものと思われます。

石垣は、調査区南縁の法面に付されていたもので、近・現代の石垣を取り外した後、裏込に相当する部分で基部の石積みが残置されている状況が確認されました。当該域に展開する水田の土留めとして設置されたもので、近世以降、修復を重ねながら連綿と使用されてきたようです。

遺物は、陶磁器、鉄製品、銭貨等が出土しています。

(2) 中世



写真4 6区北 近世の道状遺構（西から）



写真5 6区北 近世の石垣（南から）

中世に帰属する遺構は、道状遺構5条が発見されました。発見された道状遺構は幅狭な硬化面のみが遺存していた畦状のものですが、基盤層の砂礫層直上に構築されており、近世に帰属する道状遺構とは明らかに構築面が異なっています。

遺物は、かわらけ、陶磁器、銭貨等が出土しています。

【伊勢原市No.163遺跡 6区南の調査】

(1) 近世以降

該期の遺構は、2箇所の水田跡が発見されています。6区に展開していた水田の継続部分が確認されたもので、6区同様、複数枚が重畳していることが確認されました。

遺物は、陶磁器、鉄製品、銭貨等が出土しています。

(2) 中世

中世に帰属する遺構は、6区から継続する石敷道路状遺構の延伸部分、弧状石列の延伸部分、石垣1(箇所)が発見されました。

石垣は東端部の法面に付されていたもので、石敷道路状遺構を破壊して構築されていました。時期的には近世まで下る可能性があります。おそらくは、6区北で検出された石垣と同一のものと思われます。

遺物は、かわらけ、陶磁器、銭貨等が出土しています。

【伊勢原市No.163遺跡 6区東の調査】

(1) 近世以降

該期の遺構は、畝状遺構1(箇所)、土坑8基、ピット2基が発見されました。

調査区東半部を中心に宝永火山灰降灰直後に実施された思しき天地返し層の広がりが確認されており、その上面に畠跡である畝状遺構が構築されていました。天地返し層直下には中世から近世の水田跡が展開していましたことから、当該地は中世から近世前半期に水田が開かれ、近世後半期に畠地

となった後、近・現代になって再び水田として利用されるという変遷を辿るようです。

遺物は、陶磁器、鉄製品、銭貨等が出土しています。

(2) 中世

中世に帰属する遺構は、道状遺構3条、溝状遺構2条、土坑2基、ピット5基が発見されました。これらの遺構は、基盤層となっている砂礫層上に堆積する黒褐色土を確認面としています。3条が併走する道状遺構は、延伸方向からみると6区で発見された石敷道路状遺構と連絡する可能性がありますが、その構造には大きな違いが認められます。形態的には6区北で発見された版築状の硬化面をもつ道状遺構にちかいめ、本区で発見された道状遺構の帰属時期についてはさらなる検討が必要です。

溝状遺構は道状遺構の脇に構築されており、側溝と考えるのが妥当だと思われます。

遺物は、かわらけ、陶磁器、銭貨等が出土しています。

4.まとめ

今回調査を実施した伊勢原市No.163遺跡はいわゆる大山道に近接した調査区で、そのためか、発掘調査では中・近世の道状遺構が多数発見されました。とりわけ、6区と呼称する調査区で発見された13世紀前半～14世紀代に帰属すると考えられる石敷道路状遺構は、大形の河原石を敷き詰めた極めて特徴的な形態を呈しています。先に述べたように、この石敷道路状遺構は、時期的には鈴川を挟んだ右岸側の段丘面に位置する中世の屋敷地（13世紀後半～14世紀）との関係性が気になるところですが、子易・中川原遺跡1区の西側隣接地にあったとされる『安楽寺（廃寺）』を含め、大山山麓につくられた寺社との関係性についても十分に検討していく必要があると思われます。



写真6 伊勢原市No.163遺跡 6区・6区北・6区南・6区東 全景

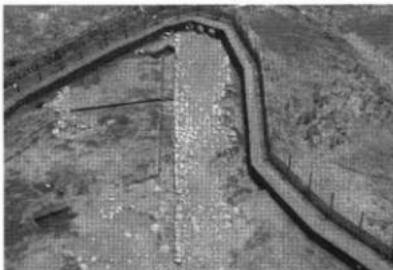


写真7 6区石敷道路状遺構 使用面全景（西から）



写真9 6区石敷道路状遺構 掘方全景（西から）



写真8 6区石敷道路状遺構 路盤検出状況(東から)



写真10 6区石敷道路状遺構 路床検出状況（東から）

鎌倉市 若宮大路周辺遺跡

— 検出された道路を中心に —

みつはしまさお さいきひでお
三ツ橋正夫・齋木秀雄

所在地 鎌倉市小町二丁目5番27、32、34、35

調査機関 株式会社 斎藤建設 文化財事業部

調査担当 三ツ橋正夫（調査助言：齋木秀雄）

調査原因 店舗ビル建設

調査期間 2013年9月16日～11月28日

調査面積 175 m²

1. 遺跡の立地

本調査地点は、若宮大路の二の鳥居北西約130m、JR 鎌倉駅東口ロータリーから北上して鶴岡八幡宮の西に至る「小町通」の西に位置している。小町通は、鎌倉駅から少し北上すると若宮大路二の鳥居前からJR 横須賀線を越え今小路に至る道路を横切り、近世以降に開削された扇川を越える。この道路は二の鳥居前で少しずれるが旧鎌倉警察署の北を通って、若宮大路の東に並行する小町大路につながっている。

小町通は扇川を越える辺りから緩やかに登り傾斜になり、中世に開発される以前の微高地の存在が考えられる。調査地点は、上り傾斜が終わる辺りの西側に位置し、敷地の東側は小町通に接している。したがって、調査地はこの微高地上あるいは縁辺部分に位置していたことになる。

2. 調査の概要

調査では、5時期の東西方向の道路と、その脇に作られた側溝や柱穴列などが確認された。しかし、調査区の中央に道路が検出されたため、脇の生活空間の様相は極断片的にしか確認できなかった。以下、説明を加えるが第1面については、先行したI区西側の調査の際に表土掘削を南



第1図 遺跡位置図

西からはじめたため、誤って予想以上に浅い位置にあった1面の道路の一部を壊してしまった。

(1面)

1面では、II区で平面的に道路1が、敷地の西に横断するように検出された。道路以外の遺構は、確認面が現在の地表から浅いこともあって、確認できなかった。また、道路面も縁に並べた石（泥岩）がはっきりしないため、道路幅にはやや不安がある。

道路は、扁平で大きな土丹を敷き詰めた路面である。II区で確認した部分によれば、道路幅4.50m前後で、上面レベルは海拔9.70～9.80mで若干西に向かって下がる。並べられた土丹が道路軸に並行であるとすれば、道路の軸線は約63度真北から西に傾いている。

(2面)

2面では、1面とほぼ同じ位置に東西方向の道

路2が検出された。道路の北側では、II区で道路上に並行する溝（北側の側溝）が確認され、I区では溝が確認できなかったものの細い杭列が確認されている。またII区の北西部では調査区外の北から南に向かい、道路の北側で直角に東に向かう横板が確認されている。構造から、建物の壁あるいは建物間の排水溝の可能性がある。

道路は、扁平で大きな土丹を並べ、隙間にそれより小さな土丹を敷き詰めた路面である。道路幅はII区東で北の側溝南壁と確認路面の間が5.20m、I区西で細かな杭と確認路面で5.0mを測る。南は調査区内で側溝が確認できていないので、道路幅は5.20m前後と考えられる。

(3面)

3面では、道路3が東西に走り、北と南に板組みを伴う側溝を検出した。北側では木組みを伴う浅い溝が確認されているが、これは側溝に対して6度ほど北に傾いている。建物に関する溝と思われ、方向からは2面の遺構である可能性を考えている。3面の海拔高は7.10m前後である。

道路は、同じく扁平な泥岩を敷き並べ、その隙間により細かな泥岩を詰めて造った路面である。道路の縁は、II区の南側で部分的に確認できるが、やはり道路の縁に整然と泥岩を並べてはいない。路面は中央が6cmほど高く、緩やかなマウンド状を呈している。道路方向はN-69°-Wを測り、道路1より6度南に傾いている。

(4面)

4面では道路4が東西に走り、部分的に板組みの残る側溝がI区、II区の北側と、II区の南側で確認されている。

道路は、平坦な泥岩を敷き並べて造った路面である。確認幅はII区の東で3.50m、西で3.20mを測り、路面は中央がやや高く、南北が3cm～5cm低い。

(5面)

5面では道路5が東西に走り、I区・II区の北側とII区の南側で側溝が確認できた。側溝は木組みを伴わない。側溝の北側には、側溝に並行する柱穴があり、I区ではその北側に方形土坑や柱穴が集中している。

路面海拔はII区の東で6.87m、I区の西で6.90mを測る。道路の方向は、北側の側溝南壁のラインでN-63°-Wを測り、道路2とほぼ同じである。

(6面)

6面は中世基盤層の下で、中世以前の遺構を確認した面である。言い換れば中世基盤層になる水田を開発した際に、開発で削平されて残った面でもある。I区では柱穴5個が、II区では周溝状の溝と柱穴14個が確認できたが、明らかに中世以前といえるのは周溝状の溝のみで、それ以外の遺構は、出土遺物はないものの、中世初頭の遺構と考えている。

遺構81

II区で検出した曲線的な溝である。溝は断面U字状で、東端で幅63cm、深さ11cm、底面レベル6.10m、最大幅73cm、深さ10cm、西端で幅53cm、深さ7cm、底面レベル6.15mを測る。覆土は暗ないし黒褐色粘質土で粘性が強くしまりがある。

出土遺物はないが、形状から竪穴住居の周溝か円形周溝墓の溝を想定しているが、いずれも確認は無い。

3.まとめ

検出遺構の年代

出土かわらけ皿を見ると、最も古い5面では手づくね皿が多い。口径は大皿で13.5cm、小皿で9cm～9.5cmを測る。器内は薄く作られた皿もあるが、厚くぼってりとした器形の皿が多く含まれている。この年代は13世紀第1四半期頃と

考えられる。

最も新しい1面では体部が丸みを帯びた大皿と口径7cmで薄く器高の高い小皿が含まれている。しかし、側壁が直線的に外反する皿は見られない。鎌倉のかわらけ編年が確定していないため断定的には言えないが、14世紀代の広い年代が考えられる。

2面は13世紀末から14世紀初め、3面は13世紀後半、4面は13世紀中頃の年代を考えておきたい。

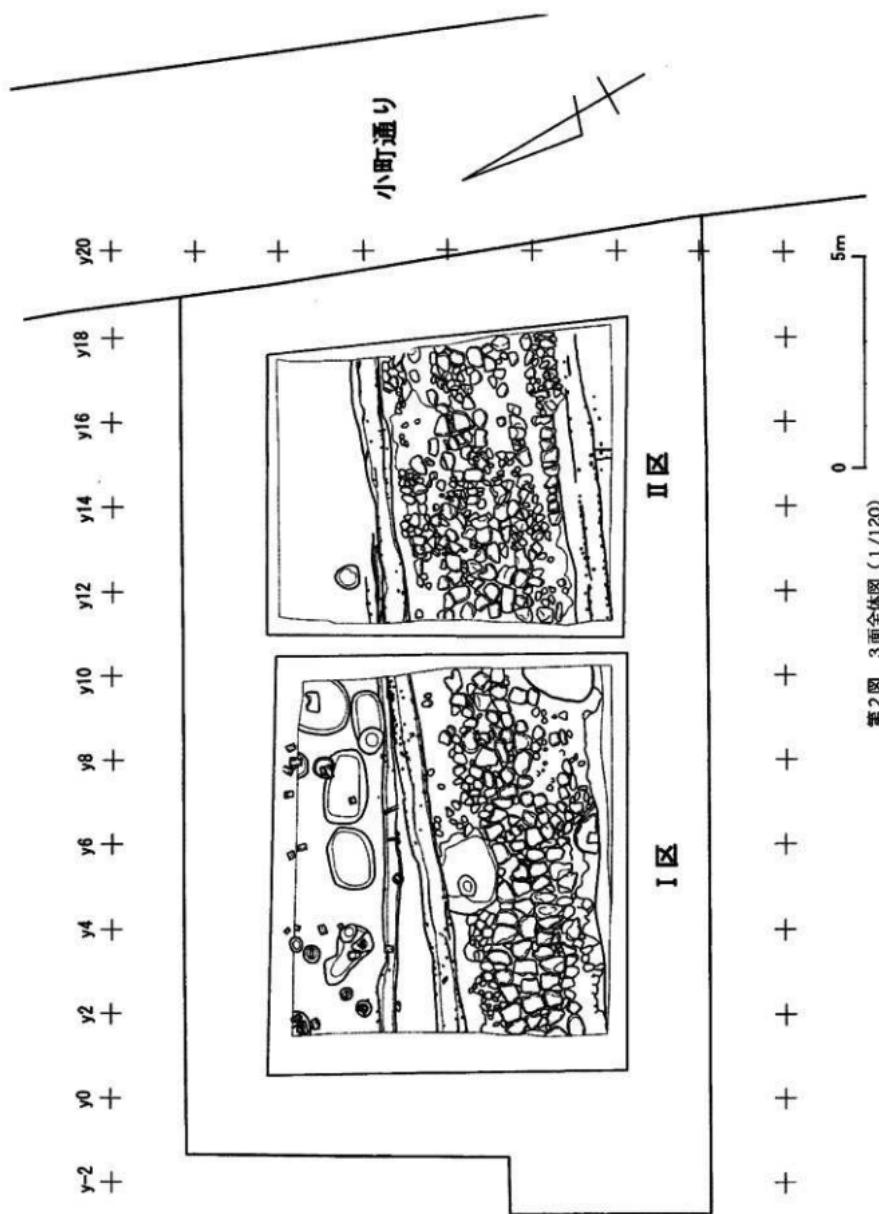
道路について

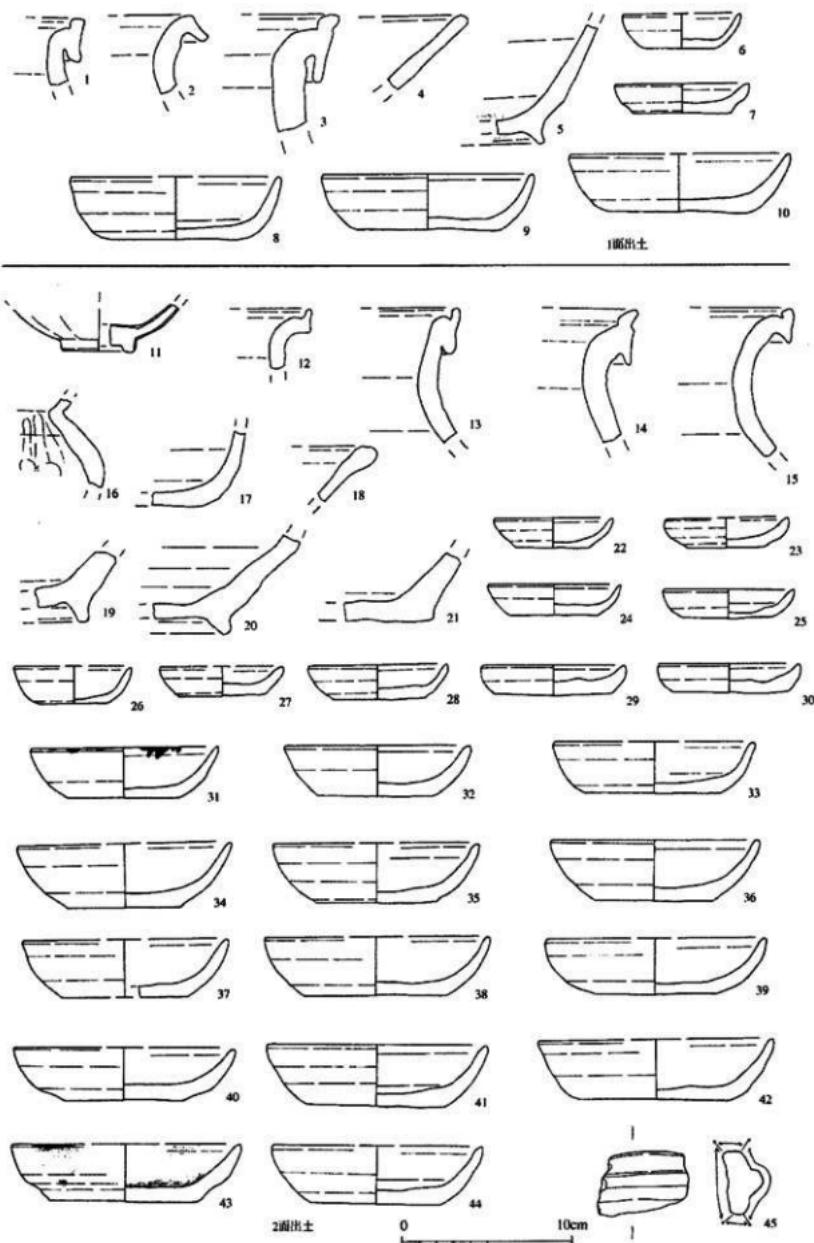
検出された道路は、幅3.5m(4面)～5.2m(2面)で、5面を除き土丹で舗装されている。諸般の事情があって、近接地で検出された道路やその痕跡と正確に合成できないが、本地点で検出された道路は若宮大路まで達していた可能性が高い。その推定線は若宮大路とほぼ直交している。この道路は鎌倉に中世の生活が始まり、ほどなくして造られ、少なくとも鎌倉時代を通じて存在していたことになる。しかし、どのような性格の道路であったか確認できない。

問題点

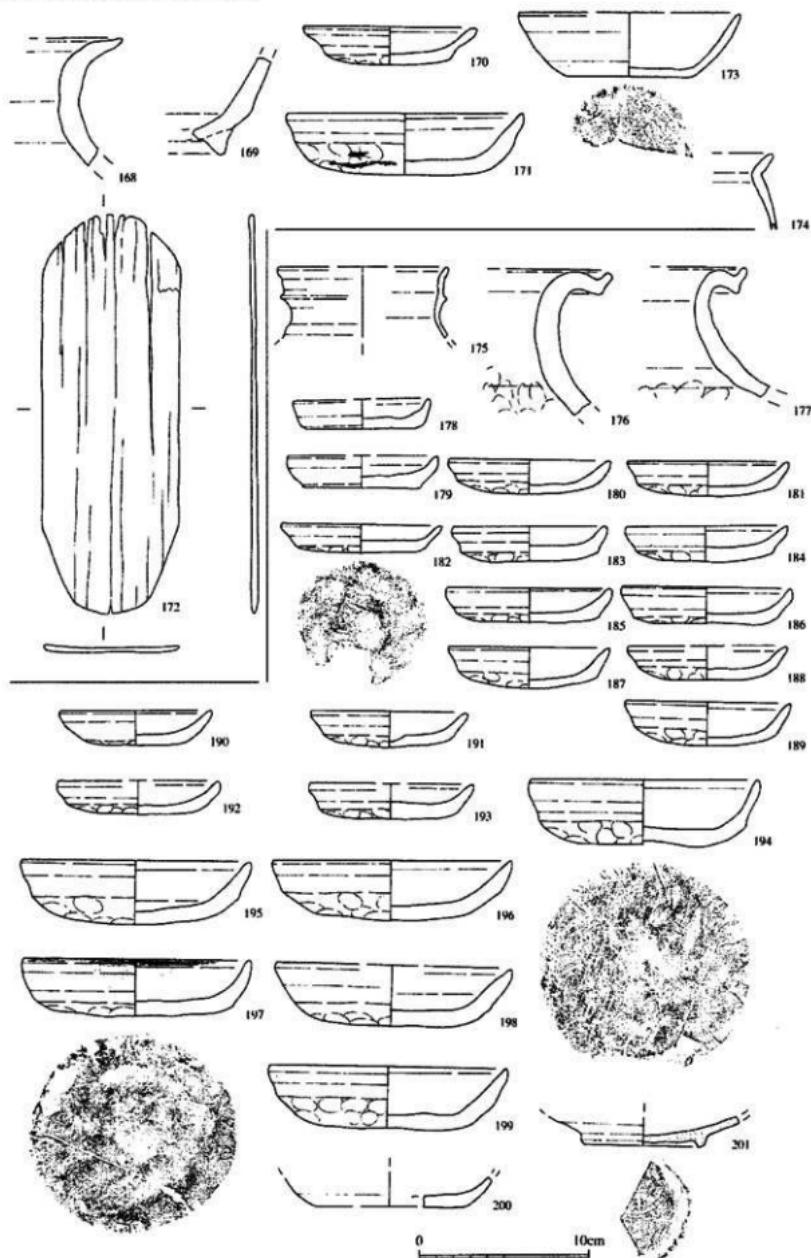
鎌倉の町割りについては、大三輪龍彦氏他が基盤目の町割り想定図を発表しているが（註）、発掘調査で検出されている道路等と合致しない点が多い。また、近年には鎌倉市役所北側の一帯までが甘繩に含まれるとの認識が強まっており、鎌倉中の町割りがどのようにされていたのか、発掘調査で確認した道路や屋敷の周りに造られた木組みの堀等から新たに検討する必要が生じている。

註 大三輪龍彦 1989「鎌倉の都市計画」
『よみがえる中世3 武士の都 鎌倉』 平凡社





第3図 1面・2面出土遺物



第4図 5面・5面構造出土遺物

伊勢原市 伊勢原市 No.71 遺跡

— 粟窪地区の調査で発見された旧石器時代、古墳時代～中世の遺構 —

木村 吉行

所 在 地 伊勢原市粟窪地先・東富岡地先

調査機関 公益財団法人かながわ考古学財団

調査担当 木村吉行・戸羽康一・新山保和

能芝 勉・大上周三・馬渕和雄

山路恭之助

調査原因 新東名高速道路建設

調査期間 2013年4月1日～2014年3月31日

調査面積 6,600 m²



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

1. 遺跡の立地

本遺跡は、伊勢原市の北東、小田急小田原線伊勢原駅の北方約2kmに位置し、標高35～37mほどの台地上及びその周辺に位置している。台地の0.5kmほど東側に歌川、0.6kmほど西側に渋田川があり、北西から南東に向かって流れている。遺跡の約300m南東には丸山城跡が所在する。

2. 調査に至る経緯と調査経過

本調査は、中日本高速道路株式会社東京支社厚木工事事務所による新東名高速道路建設に伴う事前の調査で、神奈川県教育委員会が平成22～25年度に実施した粟窪地区的試掘調査の結果をもとに平成22年10月から継続して実施している。調査箇所は、開始当初は1～7区の7ヶ所であったが、最終的には1区～13区、6区南東、調整池①・②の16ヶ所になった。調査区は、すべて伊勢原市No.71 遺跡の範囲内に含まれるが、3区の南西側は伊勢原市No.165 遺跡にもかかっている。平成25年度は、3区②、4区②、6区②、6区南東、8区②、調整池①、調整池②の調査を実施し、近世、中世、奈良・平安時代、古墳時代、縄文時代、旧石器時代の遺構・遺物が発見された。

3. 調査の概要

3区②

台地の北東に位置し、地形は東に向かって傾斜している。平成23年度の調査で、近世、奈良・平安時代、古墳時代の遺構が発見され、古墳時代に集落が営まれていたことが明らかになっている。今回の調査では、近世の段切り・溝状遺構・硬化面・土坑・ピット、中世の土坑、奈良・平安時代の溝状遺構・竪穴住居跡・土坑・ピット、古墳時代の竪穴住居跡・竪穴状遺構・土坑・ピットが発見された。古墳時代の竪穴住居跡1基には北壁に幅1m・奥行0.8mほどの穴が掘られていた。貯蔵穴として使用されていた可能性が考えられる。

4区②

最も西側に位置する調査区で、地形は南東に向かって傾斜している。平成22年度の調査で、近世、奈良・平安時代の遺構が発見されており、今回の調査でも、近世の段切り・溝状遺構・畝状遺構・ピット、奈良・平安時代の溝状遺構・土坑・ピッ

トが検出された。また、縄文時代の土坑・ピットが発見されており、1基の土坑からは土器が出土した。土器には文様が認められなかったが、出土した層位から中期の土器と思われる。

6区②

台地の南側に位置しており、地形は南及び東に向かって傾斜している。平成23年度の調査で、奈良・平安時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡などが多数発見され、集落が営まれていたことが判明している。今回の調査では、近世の段切り・溝状遺構・硬化面・畝状遺構・ピット、奈良・平安時代の溝状遺構・堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・ピットが発見された。堅穴住居跡からは9世紀～10世紀代に位置づけられる土器が出土している。

6区南東

台地南東の斜面に位置している。斜面は中世から近世にかけて段切り造成されており、数段の平坦面が造り出されていることが判明した。ここでは、近代以降の炭焼窯、近世の段切り・道状遺構・溝状遺構・畝状遺構・硬化面・堅穴状遺構・土坑・ピット、中世の段切り・道状遺構・溝状遺構・掘立柱建物跡・地下式坑・井戸・土坑・ピット、奈良・平安時代の溝状遺構・堅穴住居跡・堅穴状遺構・土坑・ピット、縄文時代のピット、旧石器時代の遺物集中箇所が発見された。中世から近世にかけて利用されていたと考えられる道状遺構は、調査区東端と調査区中央付近で発見され、調査区北側で合流していた。東端で見つかった道状遺構は低地と台地を結ぶ道で、側溝を伴っている。中世の掘立柱建物跡は調査区南東の平場で発見された。等間隔に並ぶ8基の柱穴が2列検出されたが、南側が削平されていて規模は明らかにならない。柱穴からは、13世紀代の青磁の碗や酒会壺の蓋といった舶載磁器や渡来鏡が出土している。奈良・平安時代の堅穴住居跡は6区の集落の一部と思われ、斜面地に人が住んでいたことが判明した。旧石器時代の遺物は、南側の斜面地で見つ

かった。出土したのは剥片と礫で、剥片の石材は黒曜石・チャート・凝灰岩が認められた。出土した層位は、火山灰分析の結果、姶良丹沢火山灰（AT層）を含む層よりも下層であることが判明した。

8区②

台地西側の低地に位置している。平成24年度の調査で、中世の溝状遺構・土坑、奈良・平安時代の土坑などが検出され、今回の調査でも同様の遺構が発見されることが予想されたが、近世の溝状遺構と杭列が発見されたのみであった。溝は調査区内では南北にほぼ直線的に延びており、中に宝永スコリアが堆積していた。木杭は一部溝と重複しているが、溝よりも新しい時期に位置づけられる。中世以前の遺構は発見されなかつたが、土器片、宝匂印塔の相輪等が出土している。

調整池①

台地南東の低地際に位置し、地形は東及び南に向かって傾斜している。遺構は低地際のローム部分で近世の溝状遺構・土坑・ピット、中世の土坑・ピット、縄文時代の集石が発見されたが、南東側の低地部からは遺構は検出されなかつた。また、平成24年度に調査を行った北側に隣接する7区でも遺構はあまり発見されておらず、台地南東側の低地際は、あまり土地利用されていなかつたことが判明した。

調整池②

4区の東側の低地際及び低地に位置し、地形は南及び東に向かって緩やかに傾斜している。本地區では、近世の段切り・溝状遺構・硬化面・畝状遺構・井戸・堅穴状遺構・土坑・杭列・ピット、中世の段切り・溝状遺構・硬化面・畝状遺構・堅穴状遺構・掘立柱建物跡・地下式坑・井戸・土坑・杭列・ピットが発見された。主体は中世で、2面の遺構面が検出された。中世の掘立柱建物跡は、2間×2間の1棟を確認したのみであるが、柱穴と思われるピットが多数検出されていることからさらに別の建物が存在していたと思われる。調査

区の西端で検出された溝状遺構は、北から南へほぼ直線的に流れ、南西隅で南東方向に折れ曲がっている。規模は上部幅が広い所で約2m、確認面からの深さ約0.8mを測る。竪穴状遺構は長辺2~3.5mほどの長方形または正方形に近い形を呈するものが多く、入口部分と考えられるスロープを有するものが数基認められた。地下式坑は、いずれも主室の天井の一部が崩落していた。主室の平面形態は台形を含む四角形が主体を占めるが、円形を呈するものもあった。出土遺物には、かわらけ、土製の羽釜、中国産の青磁碗、瀬戸産の平碗、常滑産の甕、石製品や錢貨などがあり、年代は14世紀~15世紀代に位置づけられるが、出土量はそれほど多くない。

4.まとめ

近世の遺構は、各調査区で発見された。調整池②では、掘立柱建物跡の柱穴と思われるビットや井戸が確認されており屋敷が存在していた可能性が考えられるが、他の調査区では、畝状遺構・芋穴と呼ばれる長方形の土坑、溝状遺構など畑作に関連するような遺構のみが見つかっており、主に畑地として利用されていたと考えられる。

中世の遺構は、6区南東と調整池②で発見された。今回の発見により、台地南側に位置するすべての調査区で中世の遺構や遺物が検出されたことになり、低地際の広範囲に中世の遺構が存在していることが判明した。6区南東で検出された遺構は、道状遺構、溝状遺構、段切りといった遺構が主体であり、建物等の遺構はさらに南側に存在していた可能性が高い。調整池②では、調査区のほぼ全域で竪穴状遺構、地下式坑、井戸、土坑等が発見されており、人々が生活を営んでいたものと思われる。遺構数に対して遺物数が極端に少なく、時期を特定するのは難しげだが、15世紀代に位置づけられる遺構があり、それについて南東に位置する丸山城との関連を考える必要がある。

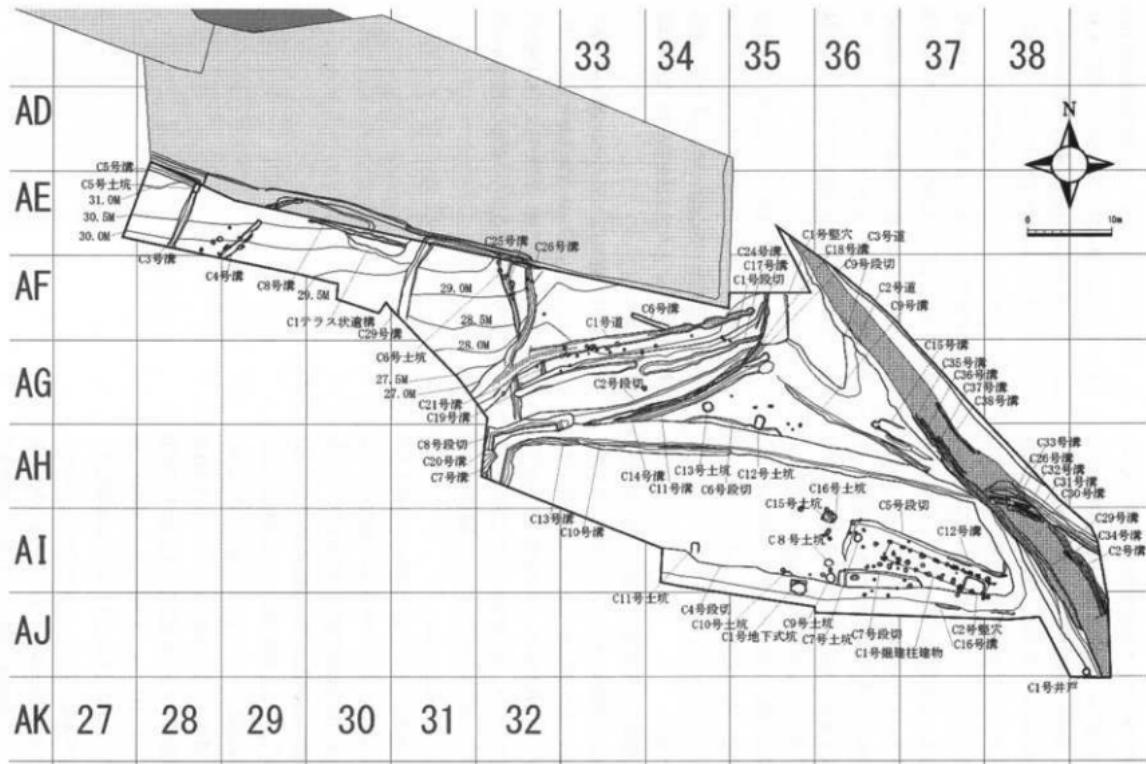
奈良・平安時代の遺構は、3区②、4区②、6区

②、6区南東で発見された。竪穴住居跡は台地上の3区②や6区②だけでなく斜面地の6区南東でも検出された。住居跡はこれまでの調査で低地際でも見つかっており、集落が台地上だけでなく、斜面地や低地際まで広がっていたことが明らかになった。

古墳時代の遺構は、3区②で発見された。今年度の調査では、古墳時代の遺構は3区②以外では確認されなかったが、これまでに東側及び南側の低地際で竪穴住居跡が発見されていることから、奈良・平安時代と同様に集落が低地際まで広がっていた可能性がある。

縄文時代の遺構は、4区②、6区南東、調整池①で発見された。4区②では中期と考えられる土器を伴う土坑、調整池①では集石が検出されたが、遺構・遺物とも少なく、人々が生活を営んでいた様子は認められなかった。

旧石器時代の遺物は、6区南東の南側の斜面地で見つかった。出土したのはいずれも剥片であったが、始良丹沢火山灰（A T層）を含む層よりも下層からの出土であり、伊勢原市最古の遺物の可能性が考えられる。



第2図 6区南東 中世遺構全体図(1/1600)

5

6

7

8

9

T

U

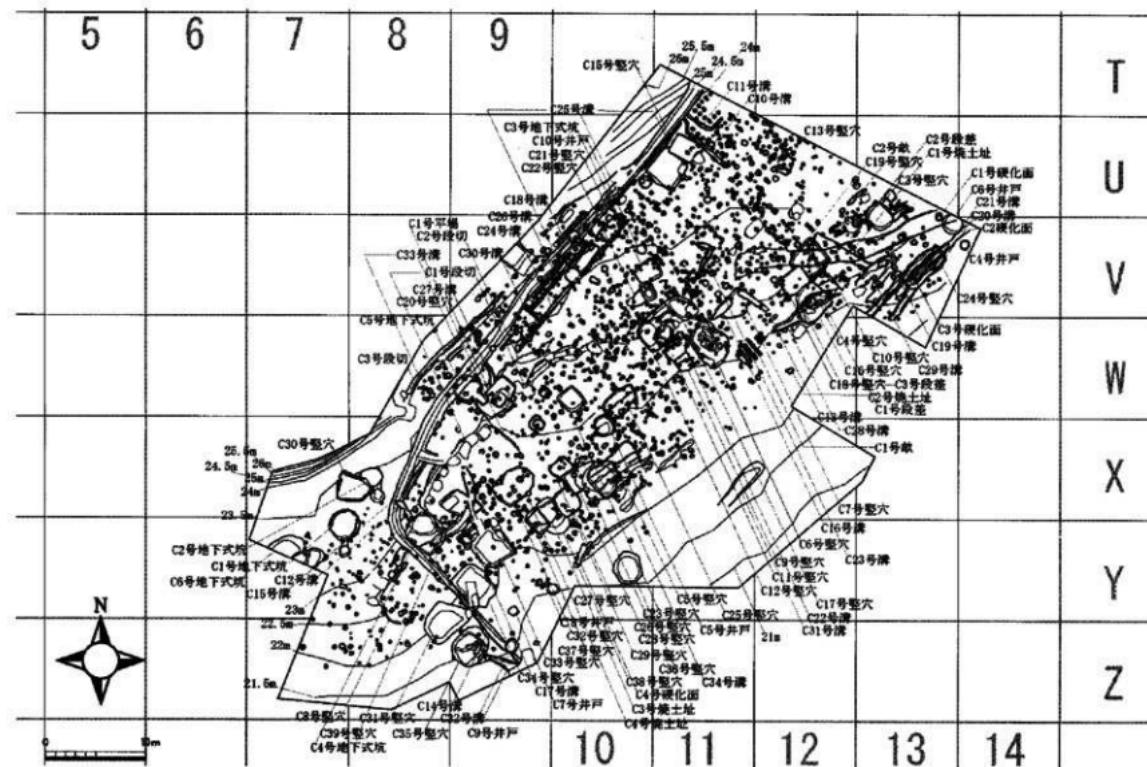
V

W

X

Y

Z



第3図 調整池② 中世遺構全体図 (1/1500)



写真1 6区南東 旧石器時代遺物出土状況



写真2 4区②J-1号土坑出土遺物



写真3 6区②H-33号竪穴住居跡遺物出土状況



写真4 6区南東 中世全景



写真5 調整池②南西側中世全景

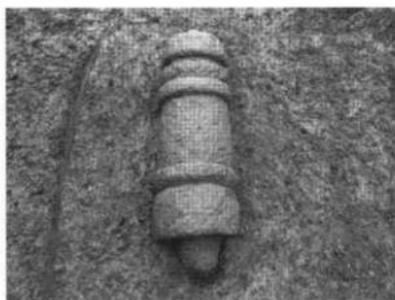


写真6 8区②遺構外遺物出土状況

小田原市

小田原城 三の丸

もとくらあと

元戦跡 第II地点（第3次）・元戦堀 第II地点（第2次）

— 中世戦国期の障子堀を改修した玉石積石垣を伴う堀 —

おおた まさあき
太田 雅晃

所在地 小田原市栄町1丁目637番4外

調査機関 株式会社 玉川文化財研究所

調査担当 太田雅晃

調査原因 小田原駅東口お城通り地区駐車場

施設ゾーン埋蔵文化財発掘調査

調査期間 2013年11月1日～2014年3月28日

調査面積 約2,148m²（第1地区：1,226m²第2地区：922m²

※拡張区含む）



第1図 遺跡位置図（1/25,000）

1. 遺跡の立地

本調査地点は小田原市栄町1丁目637-4外に所在する。JR小田原駅から南南西約280m、小田原城天守閣から北北東約300mに位置し、南東約1kmで海岸線に達する。現況の標高は北端部で約14m、南端部で約13mである。旧国鉄貨物ヤードの跡地であり、現在は市営の小田原駅東口駐車場となっている。周辺には私立高校、銀行、土産物店、飲食店などが建ち並び、市内でも最も都市化が進んだ地域に立地している。

今回の調査地点は、小田原城三の丸元戦跡、同元戦堀の遺跡範囲に位置している。地勢的には八幡山丘陵張出部の南裾に位置しており、堀の斜面地を埋める形で遺構が形成されている。

これまで元戦跡では5地点で調査が行われており、中・近世の遺構群や古代の住居址、縄文時代の遺物包含層が検出されている。また、元戦堀では7地点で調査が行われており、各所で三の丸元戦堀の一部が検出されている。今回は、第1地区が元戦跡第II地点の第3次調査、第2地区が元戦堀第II地点の第2次調査となる。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、平成25年度小田原駅東口お城通り地区駐車場施設ゾーン埋蔵文化財発掘調査業務として実施されたものである。

調査範囲は旧国鉄貨物ヤードの南半部であり、これを南北に2分割して、南側を第1地区（元戦跡第II地点・第3次）、北側を第2地区（元戦堀第II地点・第2次）として2つの調査区を設定した。各調査区には鋼矢板を打設し、堀の検出が想定される範囲には切梁・腹起しを設置して、下層の調査を行った。

3. 調査の概要

第1地区 第1地区では工程上、調査区をA～Dの4区に細分した。このうち1-A区は、第1地区南東側に設けた調査区で、障子堀を改修した石垣付堀1条（1号堀）、土坑15基（近世・中世）、溝3条（近世）、石組井戸1基（近世）、硬化面1枚（近世）、竪穴住居址2軒（古代）、ピット3基（古代）を検出した。

主な遺構は1号堀で、長さ32.4m、幅7.6m、深さ3.2～5.3mの南北方向の堀を検出した。堀の西側法面には下層の堀障子を削り込んで玉石積みの石垣が施されており、改修の痕跡を確認した。障子の幅は30cm、高さは1.2m、断面は鋭角な台形状である。堀の覆土は有機質を多く含んだ粘質土で、下層から志野織部の角皿や端反皿などが出土しており、宝永火山灰の堆積が見られなかつたことも考慮すると、17世紀の中頃には既に埋没していたものと考えられる。

1-B区は、1-A区の北側に接する調査区で、地表下-60cmで地山を確認した。検出した遺構は1号堀、土坑3基（近世）、道状遺構1条（近世）、ピット1基（近世）である。

1-C区は、1-A区の西側に接する調査区で、調査区の大半は2008年の第2次調査で近世初頭まで調査が行われている。今回の調査で検出した遺構は、石敷遺構1基（中・近世）、竪穴状遺構1基（近世）、段切り1基（近世）（以上の3基は前回調査の残り）、土坑5基（中・近世、古代）、溝1条（中・近世）、素掘井戸1基（中・近世）、焼土址4基（中・近世）、集石2基（中・近世）、竪穴住居址3軒（古代）、ピット56基（中・近世、古代）である。

1-D区は、1-B・1-C区の西側に接する調査区で、南に向かって下る地山の傾斜を埋める形で形成された近世～古代の8面の遺構面を確認した。検出した遺構は、石敷遺構1基（中・近世）、竪穴状遺構1基（古代）、掘立柱建物址1棟（中・近世）、土坑29基（中・近世、古代）、溝2条（中・近世）、素掘井戸4基（中・近世）、礎石3基（中・近世）、石列2条（中・近世）、焼土址22基（中・近世）、集石9基（中・近世）、ピット240基（近世、中・近世、古代）である。

第2地区 第2地区では、鋼矢板内部で東西方向に延びる長さ36.6m、幅10.5m（復元値は約

18m）、深さ6.8～8.6mの障子堀1条（2号堀）を確認した。堀は概ね東西方向で、一部鉤状に屈折する。覆土は近代の造成土、江戸時代中～後期の堆積土、江戸時代前期の堆積土に分かれ、調査区西側の壁面では、標高7～7.5mの付近で1707年に降灰した宝永火山灰が水平に堆積している状況を確認した。堀底には堀障子が構築されており、東側では浅い田の字、西側では不定形な船底状の堀障子を検出した。遺物は主に宝永火山灰より上の層から出土しており、北側に隣接する日向屋敷（江戸時代後期）から混入したと考えられる「日向」の朱書きの入った磁器類や、城米曲輪関連の遺物と考えられる三つ葵の家紋瓦などが出土した。

鋼矢板外部では2号堀の肩口を検出するとともに、2号堀に直交する新発見の障子堀1条（3号堀）を確認した。3号堀は南北方向に延びる長さ17.4m（第2地区範囲分も含む）、幅8.7～1.6m、深さ4～4.5mの障子堀で、断面は漏斗形を呈する。遺物はほとんど出土しなかった。

4.まとめ

今回の調査では、障子堀を改修した石垣付堀1条（1号堀）、障子堀2条（2・3号堀）を検出した。いずれも戦国～江戸時代前期の構築と考えられる。このうち、1・3号堀は、今回初めてその存在が明らかとなった堀である。また、2号堀は、堀底までの調査によってその規模が判明したほか、鉤状に屈折する法面や、田の字あるいは船底状に構築された堀障子を検出するなど、低地部における三の丸堀の様相の一端を確認することができた。

そのほか、本遺跡では第1地区で古代の竪穴住居址、中・近世の焼土址、土坑、溝などを検出している。八幡山丘陵の縁辺部に連綿と遺構を形成していた状況を確認することができた。

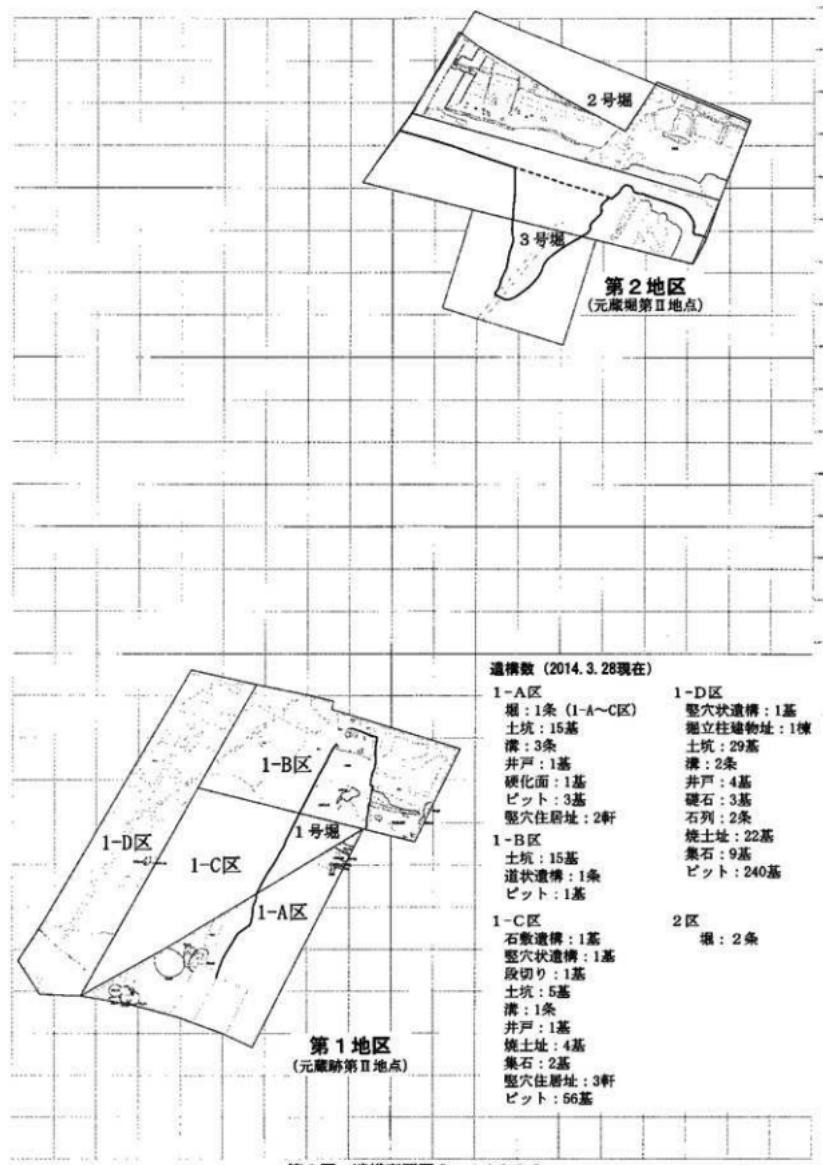




写真1 1号堀全景（北東から）



写真2 1号堀石垣検出状況
(北東から)



写真3 1号堀石垣検出状況詳細
(東から)



写真4 1号井戸全景（東から）

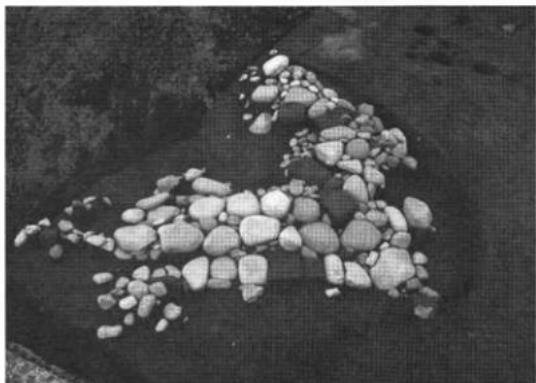


写真5 1号石敷遺構検出状況
(南から)

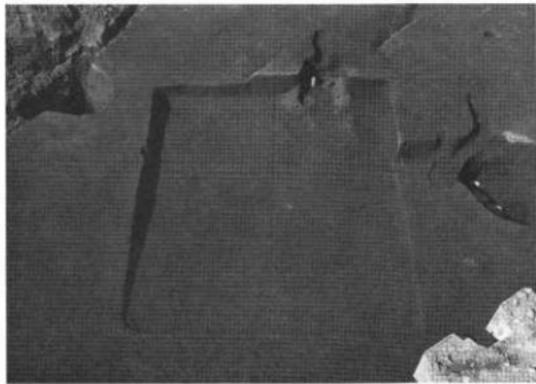


写真6 4号竪穴住居址全景
(南西から)



写真7 2・3号墳全景
(南西から)



写真8 田の字状の障子
(南西から)



写真9 船底状の障子
(北西から)

〔紙上発表〕横須賀市 矢ノ津坂遺跡（平成 16・17 年度調査）
 — 東京内湾を望む弥生～古墳時代の高台集落 —

しんかい もとふみ
 新開 基史

所在地 横須賀市浦賀一丁目 9-5 他
 調査機関 財團法人かながわ考古学財團
 調査担当 宮戸信悟・吉田政行・新開基史
 調査原因 横浜横須賀道路（馬堀海岸～佐原）建設
 調査期間 2004 年 10 月 1 日～2005 年 5 月 31 日
 調査面積 2,109 m²

1. 遺跡の立地

矢ノ津坂遺跡は、京浜急行線馬堀海岸駅の南東約 200 m、標高約 50 m の丘陵上に位置している。遺跡周辺の基盤層は風化に弱い三浦層群であり、複雑に開析を受けて樹枝状に谷戸が形成される三浦半島特有の地形をなしている。遺跡の立地する丘陵は北西と南東の鞍部で周辺の丘陵と連なっており、現在は西側へ続く丘陵が住宅地により削平されているが、周囲の東西一連の丘陵が東京内湾側と浦賀港側の分水嶺となっている。南西側は浦賀港から北へ延びる谷戸が入り込み、急峻な崖となっている。この谷戸を利用して遺跡西側の峠を越える道が矢ノ津坂（県道 208 号）と呼ばれ、馬堀海岸から浦賀港へ抜ける要路となっている。遺跡からは北に東京湾内湾が一望でき、弥生時代には丘陵直下まで海岸線が迫っていたとみられる。

2. 調査に至る経緯と調査経過

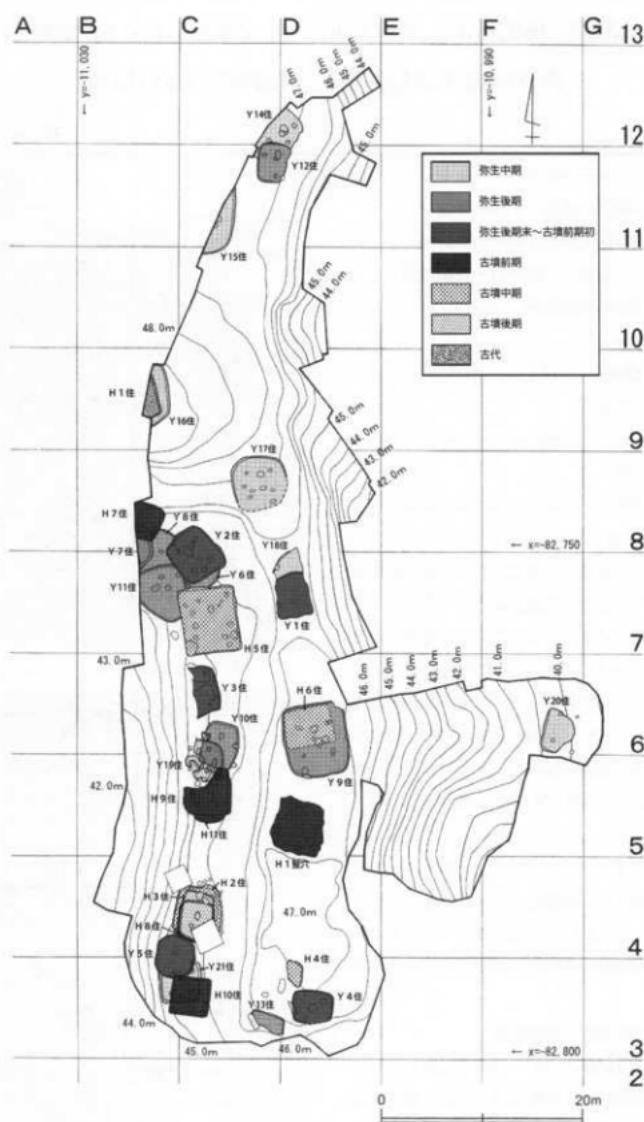
東日本高速道路株式会社（旧日本道路公团）による横浜横須賀道路（馬堀海岸～佐原）建設事業に伴う事前の発掘調査として実施したものである。昭和 33 年に「矢津坂」工事場にて採取され



第 1 図 遺跡位置図 (1/20,000)



第 2 図 遺跡周辺の地形 (1/5,000)



第3図 矢ノ津坂遺跡 遺構配置図 (1/500)

た土器等を元に赤星直忠により「矢津坂土師遺跡」として周知された遺跡（赤星ノート横須賀 196 記載）で、平成 14 年 3 月に神奈川県教育委員会が試掘調査を実施し、遺構・遺物が発見され、平成 16 年 10 月 1 日より財団法人かながわ考古学財団が本格調査を実施した。調査は残土を丘陵上で場内処理する必要があったため、調査区を北区・東区・中央区・南区に 4 分割して実施した。最初に北区次いで東区の調査に着手したが、平成 17 年 1 月末まで遺跡北側丘陵裾部に所在する高尾横穴墓群の調査と並行して実施していたため調査に時間を要した。南区の調査は 1 月中旬より着手し、4 月に調査完了後、埋め戻しおよび残土移動を急ぎ、中央区の調査に着手した。以上の工程で弥生時代以降の調査終了後、調査区西側の斜面で確認された縄文時代の包含層の掘削を実施し、5 月 31 日に調査を終了した。なお、旧石器時代のグリッド調査は各地区の最終工程で実施したが、遺物は検出されていない。

3. 調査の概要

縄文時代 該期の遺構は検出されなかったが、調査区西側の斜面部に残存した遺物包含層を中心に遺物が検出され、早期前半の撫糸文土器、早期後半の上ノ山・入海式並行、条痕文、下吉井式、前期の諸磯 b 式、浮島式、後期の加曾利 B 式の土器片が出土している。

弥生時代以降 弥生時代中期から古代までの住居址が 32 軒、竪穴状遺構 1 軒、焼土塗 2 基、土坑 1 基が検出されている。時期別の内訳は弥生時代中期が竪穴住居址 8 軒・焼土塗 2 基、弥生時代後期が竪穴住居址 8 軒、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭が竪穴住居址 5 軒・土坑 1 基、古墳時代前期が竪穴住居址 5 軒・竪穴状遺構 1 軒、古墳時代中期が竪穴住居址 4 軒、古墳時代後期が竪穴住居址 1 軒、古代が竪穴住居址 1 軒である。

これらの遺構は、丘陵の稜線上と 1 m 程下がっ

た西側斜面肩部の緩斜面とに南北方向に列をなすように構築されており、その間に 4 m 程の空間地が存在する。この部分は幅 2 ～ 3 m 程度の比較的平坦な面があり、集落内の通路として利用されていた可能性がある。この集落が立地する瘦せ尾根は平坦面がほとんど無く、集落を形成するに不向きな地形であり、住居を営むには僅かな稜線上の平坦部と西側緩斜面に選地せざるを得ない状況である。このため、遺構の重複が非常に多く、またそれぞれの遺構も尾根自体の浸食・風化や後世の削平などにより遺存状況が非常に悪いものが多くあった。

弥生時代中期の竪穴住居址は 8 軒検出された。この内 Y 20 号住居址のみ丘陵尾根から東に約 20 m、比高差約 6 m 下った丘陵鞍部に単独で存在しており、完形の環状石斧が出土している。この住居址の立地する鞍部は南北から谷戸が入り込み、比較的丘陵への登坂が容易な箇所であり、現代でも南北の谷戸から丘陵上の住宅地へ通ずる道路が設置されている。このため、Y 20 号住居址は集落への入口に当たる場所に立地しているとみられる。尾根上の Y 17 号住居址からは太型蛤刃石斧・抉入柱状片刃石斧・扁平片刃石斧が各 1 点出土している他、管状土錐が 1 点している。そのほか磨製石斧類は Y 15 号住居址から柱状片刃石斧、Y 14 号住居址から基部を柄の胸穴にはめ込めるよう細く加工した両刃の伐採斧が各 1 点出土している。また、Y 14 号住居址からは鉄製の鑿が 1 点出土している。遺構出土の土器は、宮ノ台式期後半のもので占められるが、遺構外出土の小片では擾流水文と思われる壺の肩部片や櫛描横走羽状文の施された壺の破片が出土している。器種構成では調査中全体として壺の個体数が少ない印象を受けた。遺構・遺物の遺存状態が悪いため明確ではないが、整理作業で分類した重量比でも壺 52.7%、壺 30.9% と壺に対して壺の量がかなり

少ないようである。

弥生時代後期とした竪穴住居址は8軒検出されている。いずれも遺存状態が悪く、重複もあり、遺物の帰属の判別が困難であった。また個体として実測可能なまとった出土遺物も少なかった。比較的まとまって遺物が出土しているY 11号住居址では、肩部から口縁部の輪積み痕をヘラナデで潰す裏、頸部にS字状結節文に区画された羽状繩文帯を持ち脣部下位に輪積み痕を1段残し刻みを施す広口壺などが出土している。

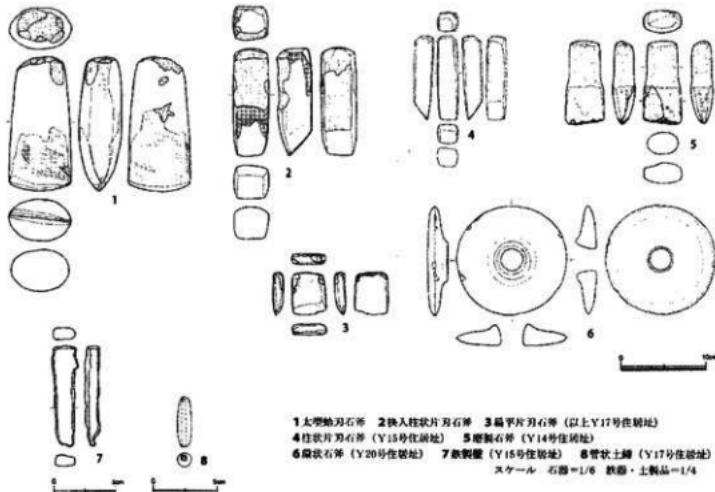
古墳時代前期から中期の竪穴住居址は9軒検出されており、前期のH 10号住居址、中期のH 5号住居址から長さ5cm、直径3cm程の管状土錐が出土している。また、前期のH 9号住居址からは剣形とみられる石製模造品が1点出土している。

また、弥生時代中期から古墳時代後期を通じて住居址内から敲石が比較的高い頻度で出土している。各時期に通有の生業に関わるものと考えるならば、漁労に関係するもの可能性も考えられる。

4.まとめ

矢ノ津坂遺跡の集落は、弥生時代中期宮ノ台式期後半（紀元前190～50年頃：Y 15号住居址炭化材年代測定結果）から営まれ、後期前半が不明瞭なもの以後少なくとも古墳時代中期まで継続して営まれた。調査範囲内での各時期同時存在住居数は遺構の重複関係や土器様相から2～5軒程度であったと推測される。集落としては小規模であるが、完形の環状石斧や多様な磨製石斧類・鉄製鑿の出土、東京内湾側を一望する立地であることから、これまでのところ弥生時代の集落跡があまり知られていない東京内湾側と浦賀・鴨居付近の集落との間を結ぶ重要な位置を占める集落であったことが想像される。また、少ないながらも漁労具が出土しており、周辺に水田可耕地が少ない立地からも、漁労あるいは半農半漁で生業が営まれていたものであろう。

なお、第4図4のY 15号住居址出土柱状片刃石斧の報告書掲載実測図は1/3で掲載するところ誤って1/2で掲載していた。観察表掲載法量が正しく、この場を借りて訂正する。



第4図 矢ノ津坂遺跡 弥生時代中期出土石器・鉄器・土製品



写真1 遺跡周辺空撮（南から）



写真2 調査区北側遠景（南東から）



写真3 調査区北側全景（南から）

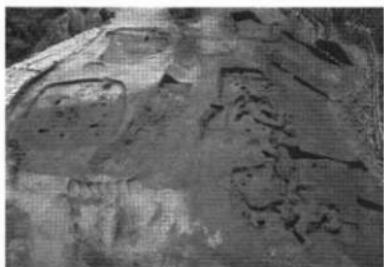


写真4 調査区中央部全景（北から）



写真5 調査区南側全景（北から）



写真6 Y 20号住居址と尾根の位置



写真7 Y 20号住居址遺物出土状況

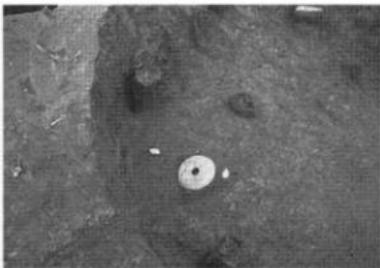


写真8 Y 20号住居址環状石斧出土状況



写真9 Y 17号住居址遺物出土状況

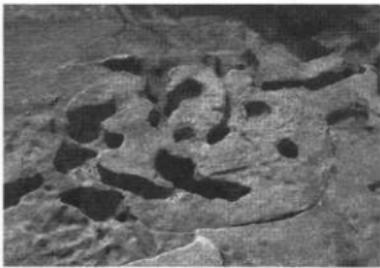


写真10 Y 19号住居址床面の動物巣穴による攪乱

第38回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表会担当役員 ○橋口豊・鯉渕義紀・渡辺昭一・浅賀貴広

第38回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨

編 集 第38回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表会担当

発 行 神奈川県考古学会

発行日 2014年（平成26年）10月26日

印 刷 アンクベル・ジャパン株式会社 TEL. 045-914-6653

